

後漢書

卷八

稜威言別

八

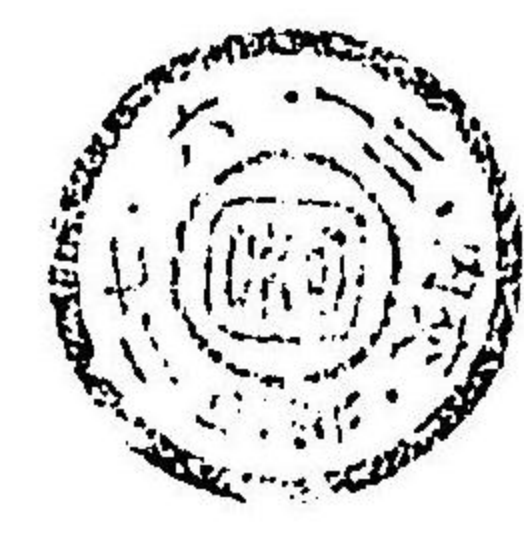
16
77

館書圖京東			
九	一		
四	六		
冊	號	架	函 類 門

稜威言別卷之八

朝倉官朝廿一首

紀九首記十四首
其内有同歌二首



紀曰是日大舍人驟言於天皇曰穴穗天皇為眉輪王見

殺シセラ天皇大驚イタクホトコカメ云云為欲殺眉輪王案劾所由眉輪王曰臣

皇
命
唯
報
父
仇
而
已

天位唯報父仇而已坂合里彦皇子深恐所疑竊

眉
輪
王
遂
共
得
間
而
出
逃

遂共得間而出逃入圓大臣宅天皇使ツクメ乞之ヲモヒタマフ大

使
報
曰
蓋
聞
人
臣
有
事
逃
入
王
室
未
見
君
王
隱
匿
臣

使報曰蓋聞人臣有事逃入王室未見君王隱匿臣

舍方今坂合里彦皇子與眉輪王深恃臣心來臣之舍誰

忍送歎由是天皇復益與兵圍大臣宅大臣出立於連索

脚帶時大臣妻持來脚帶愴矣傷懷而歌曰

天皇ハ、允恭天皇皇子、穴穗天皇、御同母弟、大泊瀬幼
 武、天皇之奉申、大和國、城上郡、泊瀬朝倉、官位、天下所
 治き、肩輪王也、仁徳天皇、御孫、大草香皇子、御子也、坂
 合、里彦皇子ハ、允恭皇子、大泊瀬天皇、御同母兄也、
 圓大臣ハ、大使主ありき、此時大臣なり、故に、
 を相兼、し、あ、し、此段ハ、穴穗天皇、向ふ故あり、
 て、眉輪王、父、大草香皇子を殺して、其嫡妻長田皇女
 を率、来坐て、皇后と封じ、賜ひ、
 七つ、奉、圓、大使主、仇を報、
 童男に、て、け、を甚、嫌、懐、坐て、御軍を、
 家を圍、坐、き、此、時に、大使主、妻の心にて、
 弒、
 著、
 こ、
 飲、
 帝、阿、遙、比、那、陀、須、暮、

○飲、
 武、
 女、
 夫、
 稱、
 君、
 ○多、
 類、
 を、
 あ、
 ○下、
 ○那、
 七、

○稜威言別

八之二

かり、鳴施ハ、所知を以とも、所知めすをもいへハ、此
 も、七重多にと云え也、もて袴と云物ハ、然り幾重も、
 重ね着つきあうを、此ハ、穿れられハ也、○備播
 尔施々始帝ハ、庭に立てを、延て云なり、此延言の例、
 屢々此れハ、此ふを漏れ、○阿遥比那施須幕ハ、脚帶
 正もより、那と、多と、恒に親く通へり、抄子、李下不正
 ありと云る、是をうし、解み、脚帶之徒焉毛也、乃阿
 の故、那あれバ、あぶれと云て、あぶれとハ、無益に餘る
 を云也と云ふハ、もて上句に、帛之袴を、七重と云は
 おほ流うあし、もて上句に、帛之袴を、七重と云は
 ハ、天皇の恩頼の厚き譬へ、下に脚帶正と云るを、其、
 厚き恩頼を忘て、眉輪王に與し、鞍手手の君に、禁禦奉
 厚き恩頼を忘て、眉輪王に與し、鞍手手の君に、禁禦奉

る行状あるを、悲しむあり、幕の歎息、常ハ軽きやう
 あるも、多かれと、此等を以て、凡てをも知くし、
 ○一首のまハ、臣する者も、天皇みこも、厚く奉仕へき
 そのまね、今此もみ就て申さば、御代この恩頼ハ、帛
 の袴を、七重かさねするも、厚く重きるある
 を、其、恩頼を奉り忘て、脚帶ハ、袴を引奉て、その裾を
 と穿れ、よく、吾夫の君ハ、眉輪王に與し、脚帶を、
 かまひ、より、吾夫の君ハ、眉輪王に與し、脚帶を、
 正して、向ひ賜へる状あるが、かあしと也、諸抄、皆
 代匠記曰、安康紀よ、眉輪王、天皇を裁せるつりし
 後、惟畧天皇を、おそれ、圓、大臣の家、ふげ隠れ
 取へるを、彼、大臣の衆を、兵を率て、取かこませ、
 下に、大臣出て、かしくまり、眉輪王のたりに、さま

きいそへ、なるそりし、

四年秋八月辛卯朔戊申、行幸吉野宮、庚戌幸于河上小

野、命虞人駟獸欲躬射而待、虵疾飛來、嚙天皇臂、於是蜻

蛉忽然飛來、齧蟲將去、天皇嘉厥有心、詔群臣曰、為朕讚

蜻蛉歌賦之、群臣莫能敢賦者、天皇乃口號曰、

吉野宮ハ、應神天皇十九年より、又之を以て、次々紀

中にも、萬葉にも、多く出づるよし、河上、小野ハ、即

蜻蛉野あり、其他のよし、皆御寄の上よりし、

野磨等能、鳴武羅能、隨該備之々符、須登、拖例、柯舉、能居、登

鳴、飲、腹、摩、陛、備、摩、鳴、須、飲、腹、枳、泚、敷、賊、據、鳴、枳、舸、斯、題、拖、磨

々、枳、能、阿、娑、羅、備、隨、々、伺、施、都、魔、枳、能、阿、娑、羅、備、隨、々、伺、斯

々、魔、都、登、倭、我、伊、麻、西、磨、佐、調、麻、都、登、倭、我、隨、々、西、磨、隨、俱

符、羅、爾、阿、武、柯、枳、都、枳、都、曾、能、阿、武、鳴、娑、枳、豆、波、野、俱、臂、婆

賦、武、志、謀、舸、矩、能、御、等、備、備、於、婆、武、等、蘇、羅、泚、豆、野、摩、登、能、矩

備、鳴、娑、枳、豆、斯、摩、登、以、符、

○野磨等能ハ、倭之なり、又次の、小牟漏岳と、對て、按

ふに、此ハ、山多乎を約て、野磨等と云、詔ふに、萬葉に、

山之常陰とあるも、山多乎陰ふて、多乎みたる陰を、

いづり、○鳴武羅能隨該備ハ、小牟漏岳也、輿地通志

ニ、小牟漏岳、在國柵、莊小村上方、青峯、喬、尊、溪、水、遠、麓

山中、有、祠、と云、是也、大和舊蹟考も、此、趣、あり、小村

○稜威言別

○ハ之五

之、國栖、莊七村、中の、一ツにて、其、嶽ハ、山際ヤマノヘの、難ヤ山也
 之云、夫、本集ニに、御獵ミカとるを、ひのたふふも、鹿
 は、おとけか、たれを、やたさるん、○之々符、須登スノトハ、猪
 鹿シカ伏也、之々、とを、猪鹿を、は、其、他の、獸にて、を、
 御獵の時、は、通稱よて、漢獵の時、魚を、那ナと云ふ如し、
 されハ、肉を、訓も、同さにて、御饌ミケに、就ツ、稱ナあり、符
 須スハ、隠カクれて、在ルを、弘ヒロく、之り、○施例シレ柯カ舉コ能ノ居コト登ト鳴ヲハ、
 誰タレ歟、此事を、あり、今、本、鳴、字を、脱ダシせ、れハ、補ホひ、つ、○飲オ
 衰ホ摩マ陛ヘ你ニ摩マ鳴ヲ須スハ、大オ前ホ子マ奏ヲあり、御親ミミツカうく詔ミコトふ、を、
 天皇の、最尊ミマカく、坐マう、故ユより、次の、句に、大君と、詔ミコトひ、下、

御歌に、を、御自ミミ、神カミと、さく、詔ミコトり、皇統の、尊ミマカき、さ、か、る
 あり、く、に、ろ、ろ、より、一、本、以テ、飲オ衰ホ摩マ陛ヘ你ニ摩マ鳴ヲ須ス、易ヲ、飲オ
 衰ホ枳キ弥ミ你ニ麻マ鳴ヲ須ス、と、あり、本、文、勝マり、し、此、二、句、ハ、さ、ま
 で、猪鹿も、伏居フス、ま、く、に、誰タレう、其、の、奏ソウした、る、を、の、さ、有、
 ○飲オ衰ホ枳キ游ユ皫ト、賊ソコ據ヲ鳴キ枳カ舸レ斯テ題テハ、大オ君ホ者キ、其、を、所キ聞カ
 而テあり、今、世に、曾ソ礼レと、云、を、古コく、を、曾ソ許コと、云、り、萬葉
 一、ふ、曾ソ許コ之、吟シ之、二、ふ、其、故ソコ尔ニふ、と、云、る、の、如、し、○施シ
 麼マ々、枳キ能ノハ、玉タマ纏キ之、なり、玉を、饒ニギハヤヒ己ニたる、を、云、な、る、
 し、十三、ふ、玉タマ纏キ之、小タビ櫛キ毛ノ鴨モ、大神宮儀式帳に、玉纏、横
 刀ヤタと、云、ぬ、○阿ア娛グ羅ラ你ニ陞シ々、伺シハ、立タ胡コ床シ、なり、和名

鈔云、胡床、風俗通云、靈帝好胡服、京皆作胡床、此間名、
 阿久良アクラと云り、記アも、吳床アと云、傳云、漢國アも、胡
 胡國の制ア、ち、へる故あるを、御國アも、此等アの字
 を書ハ、其制アをうつせ、故ア非を、漢國アも、胡
 床と云物の状ア、や、似アるを以て、其字を、假アし、
 のアあり、既ア天若日子、段ア、漢胡床、仁徳天皇、段アに、
 坐ア、吳床ア、ふとあり、元ア、御國の制アありし也、後式
 帳ア、吳床一具、漆塗長三尺三寸とあるを、大アなる状
 にも見えされとも、彼、漢胡床とあるを、見れば、此アも
 大アありしあり、名義ハ、揚座アありんと、師の云れ
 し、を、さもありふん、其後ア、加アに、倚アりか、る物あり
 て、後世の倚アりなとの属の、状アし、る物と見えし
 を云、此ア、泛いと委く、今其古圖を得り、左に写し
 を、く、勤アく知アり、今其古圖を得り、左に写し
 出、其中に、殿の内よて用ひ、はると、此アの如く、御幸
 ふとの時、假の御座アよ、用るとを、床下の、足の形、吳アふ

るふや

大和國多武峯什
藤原鎌足公吳床御圖



雲泉寒川縮寫 漢國

今俚言に、平座ヒラシマを、阿具良加久アグラカクと云いふるを、此こゝ、胡床アグラを坐ますその、居イるを、傳ツへたるを、云いふ、倭ヤマトに伺ウカガふは、出イ立タして、胡床アグラに座ますを云いふ也、胡床アグラの床トコは、立タちかゝる一本ヒトに、以テ倭ヤマトに伺ウカガふ、伊麻伺イマヒと云いふ、○施都セツ魔マ相サウ能ネハ、倭文ヤマト纏マキ之ノあり、施都セツハ、上ウ右ミ比ヒあり、下シ比ヒ武ブ烈リ紀キ、致チに、於オ褒ホ相サウ能ネ、於オ於オ寐ミ能ネ之ノ都ツ波ハ施セ、まゝに云いふ、美ミ好コ物モノあり、ままれハ、上ウの玉タマ纏マキ之ノ御ミ向ムカの對タイに、詔ミコトノコトへを下シり、玉タマ纏マキと、倭文ヤマト纏マキと、延喜式ニに、倭文ヤマト纏マキ刀ヤマト形カタ之ノ也、○阿ア娛グ羅ラ尔ニ、倭ヤマトに伺ウカガふ、上ウ注ツの如ニシ、○斯シ々々、魔マ都ツ登トハ、猪シ鹿カ待マち、登トハ、とてのを云いふ、次ツも、同ドウし、○倭ヤマト我ガ

倭々ヤマト西セ摩バハ、朕ワガタマ立タ者モノあり、○倭ヤマト俱ク符フ羅ラ尔ニハ、手タ肱コムラ尔ニ也、和名抄ニハ、腓ヒ、陸リク詞ジ云ク、腓ヒ、良リ見ミ周シュウ易イ、脚キョウ腓ヒ也、説文ニ云ク、腓ヒ、脰シユウ膾カイ也、ままとと云いふ、足タラシの腓ヒを、云いふ、手タ肱コムラ之ノ肉ニクも、其ソノに似ニる、故ユニ、手タ肱コムラと、手タを添ソへて、云いふ、解トキふ、肉ニクの聚ツる處トコロハ、肉ニク群グンの意イ也、やある、肉ニクを、胡コ久ク美ミと云いふ、阿ア万マン之ノ也、和名抄ニハ、蛇スナ搔カキ着ツキ也、和名抄ニに、説文ニ云ク、蝮ハチ、亦モ作ス、蝮ハチ、和名阿夫アブ、齧ム入イ飛ヒ、虫ムシ也、と云いふ、今イマも專センら、ああと云いふ、柯カ枳キ也、搔カキむけ、搔カキ掃ハクままと云いふ、添ソへて、添ソへて、言コト、都ツ枳キハ、取トリ着ツキる也、下シ、都ツハ、早ハヤぬと、同ドウし、都ツあり、○曾ソウ能ネ阿武アム鳴ナリハ、其ソノ、蛇スナを

ふて、上を承て、其と詔ふ也。○婀招豆波野俱臂ハ、蜻蛉速咋あり、咋而之、而を添て、心得し。

傳云、谷川氏云、蜻蛉に、かつむしと云名あり、と云は、勝虫ふて、此歌の意、據れる所と云く、さうさうの、解云、あきつと云名ハ、上代より、あきつを、和名抄に云、加介呂布の名のみを奉て、阿伎豆の名を、出、さ、い、う、み、を、や」と云り、今按に、阿伎豆ハ、明超の下畧に、羽のう、はし、と、透を、ほる、より、云名ある、傳し、蜻蛉、ふ、ほ、る、妹とも、あきつ羽の、袖とと、多くすみ、より、是を秋津島に、由縁ある名と云る、説を、死するより、下に、あきつを以て、あきつ、傳し、

○波賦武志謀ハ、昆虫をあり、虻ハ、飛虫あれとも、虫を多く、虻との故に、鳥を、飛、鳥と云、か、おと、く、な、ん、て、け、し、虫と、云、な、り、大被、詞、ハ、昆虫乃災、高津神乃災、云

や、又、え、り、り、○舩矩能御等、備備於婆武登ハ、如此名、亦、將、負、や、ふ、て、登、ハ、と、て、の、ま、也、○蘇羅游豆野摩登、能、矩、你、鳴、ハ、曾、々、利、滿、山、跡、國、なり、此、續、け、の、り、既、よ、委、く、い、い、つ、○婀岐豆斯摩登以符ハ、蜻蛉が名、の、秋、津、嶋、と、云、と、なり、彼、神、武、紀、に、云、云、猶、如、蜻、蛉、之、醫、帖、焉、由、是、始、有、秋、津、洲、之、号、也、と、ある、を、如、此、の、故、事、を、詠、り、よ、り、き、く、後、の、談、辞、あ、く、り、道、別、よ、委、く、出、又、秋、津、嶋、と、云、國、號、ハ、既、神、代、紀、に、出、て、本、千、五、百、秋、瑞、穂、國、と、云、に、就、て、稱、へ、たる、号、ある、を、是、も、上、み、云、が、如、し、傳、又、國、号、考、其、他、の、説、も、皆、僻、事、なり、

○一篇總てのまゝ、吉野山北山多を此、小村の嶽に
まゝまて猪鹿も、居あくに、誰あまゝ居と、朕大前に
申せしぞ、天皇ハ、其を聞して、玉を飭り、倭文を纏る、
胡床に立して、今う出来と、其猪鹿を待居坐るほと
に、猪鹿ハ来にして、手膝に、蛇搔着つ、心あれや、その蛇
を、蜻蛉速来て、唯もて去らると、昆虫も、斯の如く、此、
大八嶋の名を、神代より、秋津嶋と云を、已が名子負
んとてのと、詔ふあり、

本文波賦武志謀以下、飢衰枯涸休、摩都羅符、儼我柯
陔播於柯武、阿岐豆斯麻野麻登とあるを、昆虫も、天

皇に仕奉れば、汝が形ハ、置むとて、此地を、蜻蛉野と
名くと云、又一首の御歌ありきんう、一に混トする
そのまゝ、故、右の御歌のうへも、紀記ともみ、疑
ひあまにもあるに、

歌の左文云、因讚蜻蛉、名此地為蜻蛉野とあるも、汝
が形ハ置んと云、御歌を承たる文ときこゆ、まゝて此
野、萬葉歌も、多く出て、蜻蛉野とよみしるを、中古後
の歌もは、かろふの小野と、誤りしう、

又右、大御歌、記及は、羨近斯怒能、袁牟漏賀多氣尔、志
斯布須登、多礼曾、意富麻幣爾麻袁須、夜須美斯志、和

能、波利我曳随阿西鸣、

○初二句のまへ、上の美夜受比賣歌ふ出。○阿蘇廢

斯志ハ、今世の俗言に、為と云ことを尊みて、被成と

まじ、あそはまると云を、同じくして、此ハ、射賜ふを崇て、被遊

云あり、仲哀記に、猶阿蘇婆勢其、大御琴、萬葉十三に、

國見所遊シニミ アソバシなりと、古くも云しこをなり、然るに、記傳註

其外、近世オソバセ尔、右の阿蘇婆勢其、大御琴、とあるを引よ、

あそびといへば、管絃の地やうに、云思へるを、此

より、神代記に、鳥遊、甕栗宮記に、阿蘇毘久流志毘、天

智紀に干智波志能、都梅能阿素弭尔、萬葉二不、君跡

時々幸而遊賜比之、三に、世間之遊道尔、五不、鳥梅能

波奈、家布能阿素毘尔、まじ、鳥梅能波奈、多幸利加射

志互、阿蘇倍等母、拾遺集雜詞書に、御碁オシゴありけり、

る、片都保物カタタモに弓射るふと云て、何ゆふまれ、心の

ゆくめを、して、樂しみあそぶを云、即今世の言に、獵

して阿そふ、花見てあそふ、酒飲てあそふ、など云を、

全らむれし、これハ、樂も、その遊ハ、よのち中此、二ッにこ

そあれ、彼、御琴あそはせと云も、御琴彈オシゴへと、云る

同例ありに、あそは、それを云が奉にて、他しあそに轉マシ

るにハ、あそび、○斯ハ、能夜游斯ハ、能ハ、猪之惱

猪之あり、夜游ハ、痛手を負て、悩むを云、世にいもゆる、
 手負猪あり、此紀、今本に、夜游斯々能の、五言ありと云、
 脱ちるなり、記に依て、補へる、○宇柁柁舸斯固游、宇
 柁柁ハ、獸の嘖て、喉を鳴るを云、記に、其猪怒而、宇多
 岐依来とある、是也、舸斯固游ハ、懼みあり、此ハ、俗に、
 怖しと云、と云、○倭我尼尋能衰利志ハ、我逃登
 しみて、登ハ、樹にのちりたるあり、○阿理鳴能宇倍
 能ハ、在丘上之みて、在ハ、存在の意也、恒みは、在立る、
 在待、在て久しと云、用言に云、ほくくれと、萬葉一に、
 在根良對馬乃渡とあれハ、體語へも、云てくつき
 なり、

なり、

是ハ、抄に云る、言の中にて、其直きを取て云所也、
 傳云、師の荒岳也と云れ、直しうるへき、荒
 磯なり、此例なり、契沖云云、云るを、非なり、萬葉
 の、在根良も、字の誤なり、そのうへ、在とのみ云て、
 在て、久しきと云むといふ、又た、其云に
 もあれ、在て久しと云て、何のうらや、と云る
 此を、抄の、あしきみを、猶之に奉て、云るなり、今按
 ず、海は、荒磯と書る例も、野山も、荒野
 荒山とのみ云て、阿利野、阿利山など、云る例、絶て
 あら、これバ、荒丘の説、おほほうれし、又彼、萬葉一
 なる、在根良も、字の誤なり、あつ、さる、出也、
 彼、集の款に、委く、弁へたるを、云て、新し、
 在某と云も、さよくあり、此みて、俗に、在合せ、
 と云るに、云るなり、されハ、此句を、猪のうらを畏

きて、いふせんと、思ひぬ、るに、そりしも其処

ふ、在合セ^{アリア}、丘北^{ハリノキ}榛木^{ハリノキ}のほりて、透れ^{アセ}し
に云るなり、○波利我^{ハリガエダアセ}身^{アセ}陀^{アセ}阿西^{アセ}鳴^{アセ}ハ、榛^{ハリガエダアセ}之^{アセ}枝^{アセ}吾^{アセ}兄^{アセ}表^{アセ}
なり、私記に、師説云、所登之木、是波利乃木也、と云る
う如し、榛ハ、今俗に、むんの木と云木なり、萬葉に、榛^{ハリガエダアセ}
中^{アセ}あるを、萩と心得て、云る、説をいふ也、此^{アセ}子^{アセ}登^{アセ}と
あるを以て、知くし、其^{アセ}後^{アセ}ハ、しきあ如く、ぬるハ、既^{アセ}子^{アセ}
鐘^{アセ}響^{アセ}に、争^{アセ}つたるを、見^{アセ}て、ようし、阿西^{アセ}鳴^{アセ}ハ、記^{アセ}子^{アセ}倭^{アセ}建^{アセ}、
命^{アセ}、御佩^{アセ}刀^{アセ}を守りたる、松^{アセ}比^{アセ}功^{アセ}を賞^{アセ}て、い^{アセ}みよせ、御
歎^{アセ}に、袁^{アセ}都^{アセ}能^{アセ}佐^{アセ}岐^{アセ}那^{アセ}流^{アセ}、比^{アセ}登^{アセ}都^{アセ}麻^{アセ}都^{アセ}阿^{アセ}勢^{アセ}表^{アセ}、とあるを、
同^{アセ}之^{アセ}に、此^{アセ}も、猪^{アセ}の^{アセ}難^{アセ}を^{アセ}遁^{アセ}れ^{アセ}し^{アセ}た^{アセ}る^{アセ}、榛^{アセ}の^{アセ}功^{アセ}を^{アセ}賛^{アセ}、

て、吾^{アセ}兄^{アセ}とは、稱^{アセ}る^{アセ}なり、鳴^{アセ}ハ、歎^{アセ}息^{アセ}み^{アセ}て、余^{アセ}とい^{アセ}せん^{アセ}ら^{アセ}ぬ、
○一首のまハ、わ^{アセ}り^{アセ}大^{アセ}君^{アセ}比^{アセ}射^{アセ}と^{アセ}り^{アセ}さ^{アセ}せ^{アセ}賜^{アセ}ん^{アセ}と^{アセ}る^{アセ}、手
負^{アセ}猪^{アセ}の^{アセ}ど^{アセ}び^{アセ}か^{アセ}、ら^{アセ}ん^{アセ}と^{アセ}す^{アセ}、勢^{アセ}の^{アセ}お^{アセ}ろ^{アセ}ろ^{アセ}し^{アセ}と^{アセ}み、
い^{アセ}ふ^{アセ}せん^{アセ}と^{アセ}、逃^{アセ}げ^{アセ}る^{アセ}ん^{アセ}と^{アセ}き^{アセ}、き^{アセ}り^{アセ}し^{アセ}も^{アセ}其^{アセ}処^{アセ}に^{アセ}在^{アセ}
合^{アセ}る^{アセ}、榛^{アセ}の^{アセ}木^{アセ}に^{アセ}登^{アセ}り^{アセ}て、免^{アセ}れ^{アセ}つ^{アセ}、此^{アセ}、榛^{アセ}、木^{アセ}吾^{アセ}兄^{アセ}よ、吾^{アセ}命^{アセ}を、
助^{アセ}け^{アセ}得^{アセ}さ^{アセ}せ^{アセ}と^{アセ}なり、
此^{アセ}歌^{アセ}記^{アセ}云^{アセ}、夜^{アセ}須^{アセ}美^{アセ}斯^{アセ}志^{アセ}、和^{アセ}賀^{アセ}意^{アセ}富^{アセ}岐^{アセ}美^{アセ}能^{アセ}、阿^{アセ}蘇^{アセ}婆^{アセ}志^{アセ}斯^{アセ}、
志^{アセ}斯^{アセ}能^{アセ}夜^{アセ}美^{アセ}斯^{アセ}志^{アセ}能^{アセ}、宇^{アセ}多^{アセ}岐^{アセ}加^{アセ}斯^{アセ}古^{アセ}美^{アセ}、和^{アセ}賀^{アセ}爾^{アセ}宜^{アセ}能^{アセ}煩^{アセ}、
理^{アセ}斯^{アセ}阿^{アセ}理^{アセ}袁^{アセ}能^{アセ}、波^{アセ}理^{アセ}能^{アセ}紀^{アセ}能^{アセ}延^{アセ}陀^{アセ}と^{アセ}ある^{アセ}ハ、下^{アセ}に^{アセ}阿^{アセ}勢^{アセ}表^{アセ}
の三字を、脱^{アセ}し^{アセ}たる^{アセ}あり、

盧斯を、充滿足之の故とのみ心得しつゝ、あま

の歌を、解ひしり、けり上の應神朝仁徳、大御歌、下

に云り、○和斯里底能ハ、走出之なり、萬葉二子、打蟬

等、念之時尔、取持而、吾二人見之、趨出之、堤爾立有、槻

木之、或云、出立之、やあり、此も、上の伊底拖智結と云

と、同をなすを、少詞をうへて、對し孫へるなり、此、出

立、走出を、抄己下の古註等に、山のちりきりんを、云

せ之れと、然らば、此ハ、遣入の反對にて、後拾芥上に、

比理ふ立る青柳に今や鳴、此方より出立、向ひを云

なり、朝戸出かきと云も、このよしなり、景行紀、亦進

相模、欲往、上総、望海、高言曰、是小海耳、可立、跳渡と云

る、此、立、跳の、立を、出立の、立不同く、跳渡の、跳を、走出

の、走と同じ、されハ、此山ハ、朝倉、宮尔、真向ひて、常に立

馳ふも、出て、足取ふ地なり、これハ、出立とも、走出と

も、詔ふなり、和斯里、波斯里、は、通ハし云り、

解云、ちりきりと、わしると、異ことなり、としるを、

水も、早走の義なり、萬葉十二子、垂水之水、終、早敷

ハ、脚とある、是水の早敷と云ふ、出立と云ふ、山に

立、登り、出立、山の引は、たると、出立と云ふ、山に

言と、新し、と云ふ、いと、しきんが、形を云

萬葉、奇も、早敷と、續きたる、みは、あ、垂水之水

○稜威言別

〇八之十六

○與盧斯企野磨能ハ、宜山之みて、上の對疊なり、と
 此と今卒の如くみて、此能の字、穩らなり、又何
 の所由なく、句の疊れるも、いふなれハ、此下に、二
 句は、うら、落るるなり、故今、干都俱斯矩、矩播斯相野
 磨賊愛く、うらぐハシと所念オホキよしなり、中、傍に書そへて、後の定りも
 俟なり、○據墓利矩能、播都制能夜磨播ハ、上を返し
 て、再ん詔ふあり、○阿野你宇羅虞波斯、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、抄
 云、文裏妙なり、于羅ハ、毛詩に、裏字を、コロと點し、
 下に依り、下心れさなり」と、云るまてハ、宣しうと、其
 次に云るるも、さうし、解云、萬葉十三に、朝日奈

頃、目細毛、暮日奈頃、浦細毛と有て、目ぐくしを、見の
 細きく、浦くくしを、心細しきくしなり、已上 解、云
 云り、今按に、萬葉二ノ、真浦悲毛、ともよみふれバ、目細
 毛も、真細もなり、見の細と云みは、あらし、宇羅虞波
 斯も、此ハ愛しのみて、既ふ云々、此山子、莫已坐
 ける、妃夫人の顔を、おほし出て、愛しみ孫ふなり、又
 其を再ん返して詔ふを、御愛の深きなり、
 ○一首のまを、隠城の泊瀬、山ハ、朕御門の、出立、走出
 に、依立して、親しく愛しきふなるぞ、おとふ人を莫
 己しより、此、路に出る毎に、あやみくうくしきなり

ふとかり、萬葉十三に、コモリクノ、ハツセノヤマ、アラバタノ、オサカノ隠来之、長谷之山、青幡之、忍坂
ヤマハ、ワリデ、ヨロシキヤマ、イデタチノ、クシキヤマ、アタシキヤマ、アノク、ヲシモ山者、走出之、トナメ宜山之、トナメ出立之、妙山叙、惜山之、荒卷惜毛、
とあり、是七結の二句を、思ふに、よくは、大沙等のをを、
得たる人、吾うかりし人を、葬るのち、其墓かとの、葛れ
ゆくと、嘆てよりの、なり、

後文に、於是名小野、曰道小野とあり、是も出立比野
なる故也、其御墓にかよふ、道小野と名に負るまじし、

十二年冬十月癸酉朔壬午、天皇命木工闕鷄御田始起
樓閣、於是御田登樓疾走四方有若飛行、時有伊勢系女、
仰觀樓上恠彼疾行、躡仆於庭、覆所擊饌、天皇便疑御田

奸其系女、自念將刑而付物部時、秦酒公侍坐、欲以琴、
使悟於天皇、コトヒキツ、ウタヒケケラク横琴彈曰、

闕鷄ハ、大和國山邊郡、ツケ闕鷄御あり、其地より、出
木匠ありて、御田ハ、名なり、伊勢系女ハ、下に
重、嫁ありて、物部ハ、罪あり、人を、刑あり、一部あり、囚獄
令に、物部四十人、掌主、當罪人、決罰、事あり、秦酒公、
秦ハ、其始、吳國より、来帰人あり、賜へる氏なり、應神紀
十四年の條に、トナメ又也、トナメ姓氏録ハ、トナメ太秦公、トナメ布祿、トナメ秦始皇帝、
三世孫、トナメ孝武王、之後也、トナメ云、トナメ禹、トナメ豆、トナメ麻、トナメ佐、トナメ云、トナメ姓を賜へる
絹を多く、トナメ獻れる、トナメ因て、トナメ禹、トナメ豆、トナメ麻、トナメ佐、トナメ云、トナメ姓を賜へる
琴に託て、トナメ天皇に、トナメ悟し、トナメ奉る、トナメう、トナメのよし也、トナメされと、トナメ致
のさま、トナメ闕鷄、トナメ匠、トナメ死、トナメ後、トナメに、トナメ惜みてよめるを、トナメと、トナメヤ
也、トナメ此、トナメ天皇、トナメ稜威の勝れ、トナメせ、トナメあ、トナメれ、トナメ恐て、トナメ漢國、
討王に、トナメ比、トナメ奉り、トナメた、トナメる、トナメの、トナメ又、トナメ四、トナメれ、トナメハ、トナメ此、トナメ前後、トナメも、
道別、トナメに、トナメ委、トナメく、トナメあ、トナメは、トナメ下、トナメり、
少しハ、トナメこ、トナメを、トナメる、トナメる、トナメあ、トナメり、トナメん、

カムカゼノイセノヌノサカエヲイホフルカキテシガ
柯武柯噬能、伊制能奴能、紗柯曳鳴、伊衰甫流、柯枳底、志我
都矩屢麻泥、餼衰枳游、作、柯枳俱都柯倍、摩都羅武騰、倭
我伊能致謀、那我俱毋鷲騰、伊比志施俱弥、幡夜、阿施羅陸、俱
彌幡夜、

○柯武柯噬能ハ、神風之よて、伊勢と云ん、枕切なり、
泣くけのをハ、上の神武、御製ふ出、○伊制能奴能を、
伊勢之野之にて、五十鈴原を云、五十鈴原ハ、即大神、
宮を申せり、其地の地名を云て、其宮の事なり、住吉と
いひて、住吉、大神の事となり、春日と云て、春日、大神と
も、すゆる事の、あつが如し、

抄云、武藏に、武藏野あり、如く、伊勢ハ、伊勢野あり、
なほ、伊勢、系女、うづをいん、とて、伊勢、野と
ハ、系女、と云言の、あり、つとて、あり、ねハ、決て、奴
ハ、故の誤と思ひて、私ハ、改、口、上、なと云、れと、系女
ハ、系女、を、まて、云つとて、あり、又、系女、が、系女、と
いハ、バ、とて、天皇に、忠誠、ある、みも、あり、又、さて
ハ、下への、所、なき、いと、い、見、見、なる、を、や

○紗柯曳鳴ハ、榮乎なり、○伊衰甫流、柯枳底ハ、五百
經懸、而みて、上りの、所、なき、と、五十鈴宮の御榮也、
垂仁天皇の昔より、於今五百年経より、甚、如く、自今
五百世経より、大君に、堅く、奉仕ん、と云也、ふと、然
は、ゆゑ、が、つた、や、なれ、と、上、古の、教、なれ、ハ、耳、遠、き、事
も、な、り、と、さ、さ、さ、や、早、竟、此、句、等、の、耳、遠、う、り、し、故、に、

前文に、右の如き、偽りのを、書さへたる也。今此致に、
樓閣の事、宗女あり、又死刑の事なき、ありふりなき
を、あつらふ、諸注ともよ、宗女う業を、五百世り
けてと云也、と云るを、前文に惑んて、強ゆるなりを
う、○志我都矩屋麻泥爾ハ、其之盡迄にあり、其之
とを、五十鈴宮の、御榮を指るあり、此大宮の、盡と云
こやハ、あつらふなり、如此ハ、云る也、美上句とも、の、
何勢、宗女あり、ありんふハ、此盡と云こや、あけよ叶ハ
ハ、あつらふ、其之と云言、よふあつらふ、○飲衰栢
流備ハ、大君ふなり、○柯施俱都柯倍摩都羅武騰ハ

堅固將仕奉登なり、此堅固ハ、崩とレ、懈とレ、を、騰と、
そのの事也、○倭我伊結致謀、那我俱母鵝騰ハ、我余も、
長も、冀毛少く、云、母を、有るにて、後世の、と、あつらふなり、
○伊比志施俱弥幡夜、阿施羅陀俱彌幡夜ハ、言し工
けや、可惜工けやにて、阿施羅ハ、惜むとの言、工ハ、闘
鶴御田を指り、幡夜ハ、倭建命の、阿豆麻波夜と、詔
ひし、孰の、歎息なり、此も、伊比志と云る、過云の、志よ
足、續るを以て思ふに、此御田が、死する後、事にあ
わりて、云、云、勤みける工とありけるよ、可惜
工けや、うらむ、彼、工が、あつらふ、と、樓閣を、建

ふまうに、きまれしなり。

○一そのまは、伊勢の五十鈴宮の、まきうら上、斎の

祭りしより、五百年経たり、今行末も、五百年経りて、

此、神保の盡とまきうらなり、其、大宮、盡るまき、大君

ふ、堅固く奉仕と、吾命も長ともじもまき、て、宮造に、

勤勞しエを、まき、其、エは、あやしく、命継り

き、如此る宮造の時、然るありけり、惜まるとなり。

十三年春三月、狭穂彦命、玄孫、齒田根命、竊射、采女、山邊、

小嶋子、天皇聞、以、齒田根命、收付、於、物部、目、大連、而使、責

讓、齒田根命、以、馬、八匹、大刀、八口、被、除、罪、過、既、而、歌、曰、

狭穂彦命ハ、孝元天皇皇子也、齒田根命ハ、其五世、王
なり、小嶋子ハ、歌ふ采女の、下、三重、姝、條、ふ、
目、大連、バ、物部の首長なり、罪過の被除ハ、
後世の料料の如し、此も多、世の控比、隨たるを、か
く書、た、ま、

耶摩能謎能、故思摩古喻衛爾、比登涅羅賦、宇摩能耶都擬
播、鳴、思、替、矩、謀、那、斯、

○耶摩能謎能ハ、山邊之なり、和名抄に、大和國山邊、

夜、乃、倍、都、あり、采女を、其、地、より、出、る、なり、謎、と、陪、と、

通、つ、を、宇祢倍を、宇祢米とも、えうめし、解、此、山、

の、氏、也、と、姓、氏、録、を、引、て、え、る、ハ、た、故、思、摩、古、喻、

衛、采、女、の、例、を、思、ふ、し、
衛、采、女、ハ、小嶋子、故、ふ、なり、小嶋ハ、采女が、氏、又、山、邊、

不誤傷又、天皇遊詣其所而恠問曰、恒不誤中石耶、真根
答曰、竟不誤矣、乃喚集采女、使脱衣裙而著犢鼻露所相
撲、於是真根暫停仰視而斲、不覺手誤傷又、天皇因噴讓
曰、何處奴不畏朕、用不貞心、妄輒答仍、付物部使刑於野、
爰有同伴巧者、歎惜真根而作歌曰、

此段ハ、何ぞの事に係り、刑ハ、是んとし、
の巧者ハ、イソクノヤツカガヒ、オシレラ、モナケ、マナタコ、コラ、タヌク申下リ、モヒテ、
爰有同伴巧者、歎惜真根而作歌曰、
摩、施、例、柯、々、談、武、強、柯、施、羅、須、弥、讎、讎、

○ 婀施羅斯枳ハ、可惜きなり、既に出、○ 倭讎謎能随
俱弥ハ、猪名部之工也、倭讎ハ、搗津國に、猪名郡
て、姓氏録、未定雜姓搗津國、條、為奈部首、伊香我色
乎、余、六世孫、金連之後也、とるなり、○ 柯談志須弥
讎、儲、之、繫、墨、繩、なり、和名抄、内典、之、端、直、不、曲、喻
如、墨、繩、涅、繫、徑、文、也、墨、繩、和名、須、美、奈、波、 萬葉にも、多、く、よ
き、行、カク、如、此、ハ、云、カク、なり、○ 昔、我那、松、音、摩、は、
中央、に、準、繩、を、繫、て、甚、カク、カク、量、出、カク、カク、故、カク、カク、甚、カク、カク、を、重
○ 綾、威、言、別

其之亡者尔て、其ハ真根を指て、ナケバ那魯摩ハ、ナカ那柯
ラバ羅摩と、ナカナケバと者るなり、此等の言のまハ、皆改ふ云り、
○施例柯々該武豫ハ、タレカカケムヨ誰將繫タレカムカケよき、豫之まに、ヨ歎く
ヨとあり、解ふ、多し、呼捨ヨつる、與也ヨと云るを、わらし、
○阿施羅須弥維儲ハ、アタラスミナハ惜墨繩なり、抄云、是ハ多し
真根の墨繩の、空しうしを、惜むは、非ま其根本
その上エなされハ、工の造れ、スタ廢るるを、歎くあり
と、ヨとあり、ヨ解の記を、ヨようしに、
○一そのまを、スタ可憐くを、うしを、ヨ猪名部の工ぞ、
ヨ其ガ亡ちば、今りのち、誰の繫るよ、其、重き

墨繩イキはとて、本道の廢るるを、ナケ歎く、ナケなり、ナケ歎くを
旋頭歌なり、

天皇聞是歌、キコシテ反生悔惜喟然類難、イミテホトクヒトラウシヒルガキムナチヲ日幾失人哉、乃以教
ツガヒノセテ使乘於甲斐黑駒、カヒノタロコニ馳詣刑所止而赦之、ハセメテ用解徽纆、コレストコロニヤメテ復作
シテラク歌曰

是も上なると、同じ時、同じ伴、エガ、よみするなり、
ヌ農播ヌ施磨能、カヒノ柯彼能、コ矩盧古磨、ク矩羅枳制播、イシカ伊志柯、ゾ阿羅
マシ磨志、カヒノ柯彼能、ク俱盧古磨、

○農播施磨能ハ、枕詞あり、此を、カヒノ柯彼能を、隔て、ク矩盧
と云に、係れり、此は、けのこを、一巻八千糸、神御歎

記曰、天皇幸行吉野宮之時、云云、於其處立大御吳床而、
坐其御吳床、彈御琴、令為儻其孃子、爾因其孃子之好儻、
作御歌其歌曰、

阿具良章能、加微能美豆母知、比久許登爾、麻比須流袁美那、
登許余爾母加母、

○阿具良章能ハ、吳床座之なり、此時御親、吳床に坐
くを以て、如此詔り、○加微能美豆母知ハ、神之
御手以なり、天皇ハ、固り明神にましむせ也、御自も、
其所思行けり、此天皇の、とてれり、くまじ
しあり、これハ葛城山、神も、頭りれ出て、御獵に奉仕、

御送きても、安し、終らなむ、とて、終りの御行れも、全
神にまじり、後、の天皇尊たも、御自神と坐こせ
を、忘れ終り、ハ、儻佛ハ、貴み終ハ、まじり、まじり、
を、あうん、とて、く、く、く、○比久許登爾ハ、彈琴尔
にて、彈琴に合せてと云、となり、○麻比須流袁美那
ハ、儻為女也、○登許余爾母加母ハ、常世にも願なり、
此、登許余ハ、常住不變の也、常世と云に、三四種あ
されハ、此ハ、孃子、が命を、願ひ、終らぬは、あ、其、儻
の、あ、う、ん、と、て、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
變にも、が、も、と、吾御樂みと、詔ふなり、諸説、く、く、

○一そのをハ、吳床アケラに坐ス、明神アキカミの御手ミテ以テ、彈ヒキに琴コトに合ハせし、嬢子ヲトメのよき立チ儼ケンふこそ、おもしろくね、此コノ樂ガクしむに、かくやうく、常トコ住ヨ不受コみも、あつうしとなり、傳ツ云フ、本朝ホノチ月ツキ令メみ、五節イノチ舞マシ者ノ、淨御原スガノハラ天皇ミコ、之所ココ製ツク也ナリ、相傳ツ云フ、天皇御ミコ吉野キノ宮ミヤ、日暮ヒケ彈ヒキ琴コト有ア興キョウ、俄ト尔ニ之間ノ、前岫マエノケ之ノ下ノ雲氣クモキ忽ト起ス、疑アタ如キ高唐タカトウ神女カミメノ、髻ウヅ鬢ハ應オウ曲キョク而シテ舞マシ、獨ヒト入リ天アメ賜タマ、他人タニ無レ見ミ舉ヘ袖スエ五イノチ變ヒ故コト謂フ之ヲ、其ノ歌ウタ曰ク、予オレ度タ綿ワタ、度タ茂シ、邕ヒ度タ綿ワタ左サ備ヒ須ス茂シ、可カ良キ多タ萬マン乎カ、多タ茂シ度タ迹ト麻マ岐キ底ソコ、予オレ度タ綿ワタ左サ備ヒ須ス茂シ、とる説セツを、此コノの御故事ミコトコトを取テ、作ツクしる物モノとるるより、そむく五節イノチ舞マシハ、天武テンム天皇ミコの造ツク、

賜タマへる由ユハ、續紀ツギキの詔ミコトノリに、予オレに、上ウヘ、件ケの神女カミメノの予オレハ、とらに、とる説セツ以上イサとる、今イマ按オシみ、此コノ事コト既スデく、賀ガ茂シ氏ウヂも然シカらうとれ、と、從ツ彼カノ月ツキ令メ、江家エノケ次第ツグ、政事セイジ要ヨウ畧リョク、河海抄カワウミノテ等トの、あつらひの書ナヒにも、傳ツへるを、見ミよは、無クきりもあつ、と、彼カノ教オシも、古コきより、あつ、後の偽作イツヅクを、と、やせん、此コノ事コト、別ワカふ考カウへ置オく物モノも、あつ、と、あつ、は、得エ引ヒに、か、續紀ツギキ十五イハなる、五節イノチ舞マシと、云フる文フミこそ、つ、漢意カンイの潤色ジュンシキあり、信タビが、くれ、姑ナドく、藏淨貴所ソウジヤウキ、吉野キノ記キも、と、と、考カウへ合アは、

初大后、坐日下之時、自日下之直越道、幸行河内、於
 若日下部王、令奏天皇、背日幸行之事甚恐、故已直参上
 而仕奉、是以還上於官之時、行立其山之坂、上歌曰、
 大后ハ、即若日下部王、仁徳天皇、皇女ナリ、日下
 ハ、河内、国、河内、郡也、今も日下村あり、伊勢山、西、方
 ナリ、直越道ハ、鐘の響、第一、龍田山、修、云、り、萬葉六
 に、超、草香山、時、云、直、超、乃、此、徑、師、豆、と、より、條
 ふ、也、云、つ、背、日、云、ハ、東、なる、倭、云、り、西、なる、河内
 ハ、幸行ハ、東、云、り、出、る、日、を、背、後、み、し、故、也、神武
 祖、向、日、而、戦、不、良、と、ある、ハ、敵、と、戦、ふ、処、な、れ、ハ、也、
 背、と、向、と、事、不、依、て、順、く、も、逆、く、も、有、へ、き、なり、と、て
 此、段、ハ、大后、若日下部王、い、ま、河内、に、坐、け、る、は、と、
 天皇、倭、より、通、れ、お、し、る、に、婿、の、始、め、背、日、て、幸行
 こ、や、恐、し、妻、が、ら、り、参、上、て、仕、奉、む、と、詔、れ、ら、る、故、に、
 天皇、日下、の、山、より、還、り、坐、す、と、て、此、御、歌、を、い、ひ、て、結
 り、し、め、
 り、し、め、也、

久佐加辨能、許知能、夜麻登、多々美、許母、幣具理能、夜麻能、
 許知基、知能、夜麻能、賀比爾、多知、邪加由流、波毘呂、久麻加
 斯、母登、幣爾波、伊久美、陀气、淤斐、須惠、幣爾波、多斯美、陀气
 淤斐、伊久美、陀气、伊久美、波、泥受、多斯美、陀气、多斯爾波、章
 泥受、能、知、母、久、美、泥、牟、曾、能、淤、母、比、豆、麻、阿、波、禮、

○久佐加辨能ハ、日下部之なり、傳云、日下の地名を、
 日下部ともし、云、し、こ、を、此、御、言、は、し、知、ら、る、り、と、日
 下部と云、を、此、日下の地、に、居住、る、部、の、号、なる、を、其、
 部の居住、る、に、因、り、て、立、返、ら、る、り、又、地、名、を、も、日下部と
 も、云、ら、る、り、と、云、ら、る、り、と、云、ら、る、り、と、云、ら、る、り、と、云、ら、る、り、
 草香を、

○稜威言別

目下と書所以今も暗峠と云、山の下なれば、目下
 ぬは、明くならず、里なる好ふ、義訓もならずし、
 ○許知能夜麻登ハ、此方之山與みて、與ハ、與平群山
 云々也、○多々美許母ハ、墨薦ふて、此ハ、經て縹と、
 云々に係れる、枕詞也、凡ての云々、倭建、命、御致ふ云
 又、○幣具理能夜麻能ハ、大和国平群郡の山なり、與地
 通志ハ、生駒山、平群山、信貴山、龍田山と、次第して云、
 平群谷、上方、數峯平、成群因名とあり、○許知基能能
 ハ、此々之ふて、其る處を、指さる心は、云々語なり、
 此を萬葉歌どもに、表知許知と、一ツ一ツ記し、いと、同じ

ず、表知許知ハ、誰も知れる如く、彼此と書て、彼
 方此方の夕なれば、おちろろ此もつても、さしなむと
 云々に、おつけふもよみせやるを、此、許知基能ハ、必
 以先、上小物ニを云て、其物を、此此と、指て云り、萬葉
 之小、奈麻余美乃、甲斐乃國、お緑流、駿河、新國與、已知
 其智乃國之、三中從、九ふ、瀧上之、櫻花者、開有者、落過
 祁里、含有者、可開繼、許智期智乃、花之盛尔、二に、出立
 石兄、槐木、虚知期知、雨、枝刺有如、なとやうに、相並物を
 合せて、其下れのし、よとて、此等にて、其差別を、知
 へし、今世の人此心は、甚、並物を、二ツなると、此と

まてを、終らしきやうも、思ふやと、二重ぬ、己
已、然る、云云、左徒、右自、誰と、色々、様々、種々、おとの
類、皆、同例、あるを、思ふべし。

抄云、許と、字と、同後にて、通され、
ふや、傳云、此を、彼方、此方、此方、
なれば、此方、此方、此方、此方、
田、久老、万葉の歌、あるに、就て、
然るに、此と、此と、此と、此と、
す、さて、此と、此と、此と、此と、
と、云るも、此と、此と、此と、此と、
榎木、鹿、知、期、知、雨、なと、や、
も、思、ハ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
○夜麻能、賀比、尔、ハ、山、之、峽、也、
加比、と、云、行、違、は、る

を、筋、違、は、る、筋、違、は、る、筋、違、は、る、
ありんを、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
間、と、云、ふ、も、特、し、し、し、し、
和、名、抄

小、考、聲、切、韻、云、峽、山、間、
峽、山、間、
右、の、と、也、ま、ま、催、馬、樂、
伊、勢、海、に、い、せ、の、う、と、
志、保、賀、比、尔、な、の、う、と、
さ、や、は、ま、ん、見、や

の、乾、し、間、ふ、と、云、也、
○多、知、加、由、流、ハ、植、采、
なり、上、の、仁、徳、段、小、此、
出、て、其、処、ふ、云、り、
○波、毘、呂

久、麻、加、斯、ハ、葉、廣、
隱、檀、な、り、
葉、廣、と、は、
葉、廣、と、は、
廣、く、る、を、云、こ、を、
そ、も、彼、段、の、
波、毘、呂、由、
都、麻、都、婆

○稜、威、言、別

とよむる類よも、是も二人にを昨を、此類の、たゞ
 長致、文章の常にて、大ううの人を、よく心付くると
 なると、その流いてに、まゝ也。○伊久美陀氣、上を
 重ね云也、畢竟、上の伊久美竹生ハ、此句を詔ハん為
 の序、此句ハ、次の句を詔ハんより此序也、如此重ねて
 けく、くを、連疊として、あり、この古き詩文も、賞き
 るとそあり、○伊久美波泥受ハ、伊隱者不寝也、此を、
 不組寝と、まゝもよる、既ふ云、久麻久美ハ、本より同語
 なれハ也、傳の、此処の叙ハ、類、○多斯美陀氣、是も序に
 て、其、状上の、伊久美陀氣、下に、その如し、○多斯尔波

韋泥受ハ、慥に不率寝なり、多斯の意、上の暁、太子、
 御歌ハ、多志陀志尔、韋泥互牟能知波、とある処に云り、
 韋泥も、率て寝るを云ことを、其処も、上にもいひつ、
 ○能知母久美泥牟ハ、後も將隱寝なり、後を、此度
 は、まゝよるにて、得る又、空く還るとも、又後を、寛

ふ逢てんと詔ふなり、

傳云、此御歌、上、件の趣、まゝ、二ツの竹のみ、用ありて、
 華廣久麻、白檮ハ、無用なる、如く、なれど、よく思へ
 ば、まゝに、其を、白檮も、葉稠、伊久美と、つれ、多斯尔
 竹と、同じ、状なる、物なれ、伊久美と、つれ、多斯尔
 又、山之、峽、子、立、柔と、云も、白檮の、まゝ、竹へも
 峽の、下、方、上、方に、生て、立、繁、柔、えり、伊理久美、なる

寝て空しくハ送北ども、後々永く將隠寝と云ふ、
其、思ひ妻ぞ、愛しむてさへくとなり、調へ文ありて、
いとめでたき、大御歌なり、

後文よ、即令持此歌而返使也とあり、此を、右御歌を、
口授きせり、女王の御使を、其処より返し給へ
るあり令持とを書ける歌を、持しめり、

此に、草を、ミコトモ子之訓も、御言持の義なり、
其御奇を、口づらうと云ふて、行て侍く白せりと、
さきさきありけり、

天皇幸行于春日之時、媛女逢道、即見幸行而、逃隠岡邊

故作御歌、其御歌曰、

春日ハ、添上郡なり、媛女ハ、誰ともなし、逃隠ハ、畏み
耻也、此、媛女、かほよくと、御目みけし、
袁登賣能、伊加久流袁加袁、加那須岐女、伊本知母賀母須
岐婆奴流母能

○袁登賣能ハ、媛女之なり、○伊加久流袁加袁ハ、伊

隠岡を以て、伊ハ、例の笈也、後世なれば、加久流々

や有べきなれと、古ハ、早目云々、言のまゝに、如

も歌ひしにて、すらし女、さあし女なごめ、歌人の物

いれ也、萬葉にも、山際從、伊隠萬代より、

傳え、後世の心にて、かゝる岡已有り、
る岡にてハ、言はく、うね如くまれども、隠ハ、古ハ

物乎のまを、母能とのみ三例ハ、及小應神紀、履中紀
等の歌に出、これといち、彼、加久流等の、旧例なり、
傳に、母能とを、即上になら、金鈕カナスキを指て、言にもあ
ん、と云つたハ、よろし、常に、そのを、口を、むす
る、と、上、の、時、此、岡の彼方に、隠れ、る、媛女
きよて、明ら、なり、を、岡の中み、入、隠れ、る、まに、や、り、明ら、か、く、詔
る、を、怜アハレき、なり、

○フそのまハ、金鈕カナスキも、来、る、媛女あ、り、加久
より、言、ん、ん、の、詔、ハ、んと、所、念、ら、る、岡の中
に、隠れ、る、行、方、ゆる、し、とも、及、る、に、彼、る、も、り、し
金鈕イホツの、五、百、箇、も、あ、る、は、此、岡の、お、とも、を、鈕スキ、う、り、し、

撥ハネや、り、て、崩クツ、し、て、ぶ、ぶ、る、心、もの、を、と、なり、後、文、み、故
號、其、岡、謂、金鈕、岡、也、と、ある、み、合、す、れ、ハ、彼、媛女、金鈕、を
と、と、逃、ら、る、に、も、あ、る、し、

又、天皇坐、長谷、之、百枝、槻、下、為、豊、樂、之、時、伊、勢、國、之、三、重
媛、指、舉、大、御、盃、以、獻、爾、其、百、枝、槻、葉、落、浮、於、大、御、盃、其、媛
不、知、落、葉、浮、於、盃、猶、獻、大、御、酒、天、皇、看、行、其、浮、盃、之、葉、打
伏、其、媛、以、刀、刺、克、其、頸、將、斬、之、時、其、媛、白、天、皇、曰、莫、殺、吾
身、有、應、白、事、即、歌、曰、

長谷ハ、城上、郡也、大宮ハ、今、の、黒、崎、磐、坂、二、村、間、に、在
と、云、り、百、枝、槻、も、其、邊、に、在、り、大、樹、な、り、
を、愛、坐、て、か、り、る、時、ハ、行、幸、し、な、り、
ふ、出、媛、ハ、諸、國、より、由、緒、ある、人、の、女、也、形、容、端、正、を、

貢^{タテマツ}しりて、主^{ムネ}と御^ミ饌^ケふ、仕^{ツカ}奉^ホしうられき、故^コ項^{キョウ}に、領^{リョウ}
 巾^{キナ}禪^{ゼン}を掛^ケて仕^シへれ、嬰^{オウ}部^ブと云^{イハ}を約^{ヨク}りて、宇^ウ祿^{ロク}舟^{フネ}と
 ハ、喚^{ウケ}べなり、^{ウケ}なり、三重^{サエ}ハ、伊^イ勢^{セイ}国^{クニ}、三^サ重^エ郡^{クニ}にて、
 上^ウの山^{ヤマ}邊^{ノヘ}、小^コ嶋^{シマ}、赤^{アカ}女^{メノ}の劍^{ケン}の如^ニく、其^{ソノ}国^{クニ}所^ノ以^テて、喚^{ウケ}し也^{ナリ}、
 此^{コノ}嫁^{ヨメ}を、歌^{ウタ}に名^ナ高^{カウ}うりし故^{コト}ふやあり、今^{イマ}も三^サ重^エ郡^{クニ}
 小^コ采^{サイ}女^{メノ}村^{ムラ}ありて、土^{ツチ}人^{ヒト}詠^{エイ}り傳^{デン}へり、さて此^{コノ}より以^テ
 下^{シタ}三^サ首^{ウタ}共^ニに許^{コト}登^ト結^{ケツ}加^カ多^タ理^リ基^キ登^トとあり、是^{コノ}は、采^{サイ}府^フより、
 作^スてし歌^{ウタ}なり、事^{コト}のまま其^{ソノ}よしあり、此^{コノ}
 前^{マエ}文^{モン}に、以^テ刀^{タガ}刺^ス充^ツ其^{ソノ}頸^{ネク}と書^カし故^{コト}ふ、然^{シカ}う傳^{デン}へり、
 了^マべし、今^{イマ}此^{コノ}歌^{ウタ}を、^{ウケ}に、獻^{ケン}る大^{ダイ}御^ミ盡^{ジン}に、木^キ葉^{エフ}の浮^ウらん
 たるを御^ミ覽^{ラン}て、^{ウケ}しめられし、
 及^{ツキ}どの致^{チキ}と云^{イハ}る也^{ナリ}

麻^マ岐^キ牟^ム久^ク能^ネ、比^ヒ志^シ呂^ロ乃^ノ美^ミ夜^ヤ波^ハ、阿^ア佐^サ比^ヒ能^ネ、比^ヒ傳^{デン}流^{リウ}美^ミ夜^ヤ由^ユ布^フ
 比^ヒ能^ネ、比^ヒ賀^カ氣^キ流^{リウ}美^ミ夜^ヤ、多^タ氣^キ能^ネ泥^ニ能^ネ、泥^ニ陀^ダ流^{リウ}美^ミ夜^ヤ、許^{コト}能^ネ泥^ニ能^ネ、泥^ニ
 婆^バ布^フ美^ミ夜^ヤ、夜^ヤ本^{ホン}雨^ウ余^ヨ志^シ、伊^イ岐^キ豆^ヅ岐^キ能^ネ美^ミ夜^ヤ、麻^マ紀^キ佐^サ久^ク、比^ヒ能^ネ美^ミ
 加^カ度^ド、爾^ニ比^ヒ那^ナ閑^{ケン}夜^ヤ雨^ウ、淋^{リン}雙^{ソウ}陀^ダ豆^ヅ流^{リウ}、毛^モ々^々陀^ダ流^{リウ}、都^ツ紀^キ賀^カ延^{エン}波^ハ、本^{ホン}

都^ツ延^{エン}波^ハ、阿^ア米^メ表^ハ淋^{リン}幣^{ヘイ}理^リ、那^ナ加^カ都^ド延^{エン}波^ハ、阿^ア豆^ヅ麻^マ表^ハ淋^{リン}幣^{ヘイ}理^リ、志^シ豆^ヅ
 延^{エン}波^ハ、比^ヒ那^ナ袁^{エン}淋^{リン}幣^{ヘイ}理^リ、本^{ホン}都^ド延^{エン}能^ネ、延^{エン}能^ネ宇^ウ良^{リョウ}婆^ハ波^ハ、那^ナ加^カ都^ド延^{エン}雨^ウ、
 淋^{リン}知^チ布^フ良^{リョウ}婆^ハ閑^{ケン}、那^ナ加^カ都^ド延^{エン}能^ネ、延^{エン}能^ネ宇^ウ良^{リョウ}婆^ハ波^ハ、斯^シ毛^モ都^ド延^{エン}尔^ニ、淋^{リン}
 知^チ布^フ良^{リョウ}婆^ハ閑^{ケン}、斯^シ豆^ヅ延^{エン}能^ネ、延^{エン}能^ネ宇^ウ良^{リョウ}婆^ハ波^ハ、阿^ア理^リ岐^キ奴^ヌ能^ネ、美^ミ幣^{ヘイ}能^ネ
 古^コ賀^カ佐^サ々^々賀^カ世^セ流^{リウ}、美^ミ豆^ヅ多^タ麻^マ宇^ウ岐^キ雨^ウ、宇^ウ岐^キ志^シ阿^ア夫^フ良^{リョウ}、淋^{リン}知^チ那^ナ
 豆^ヅ佐^サ比^ヒ美^ミ那^ナ許^{コト}袁^{エン}呂^ロ許^{コト}袁^{エン}呂^ロ雨^ウ、許^{コト}斯^シ母^ボ阿^ア夜^ヤ雨^ウ加^カ志^シ古^コ志^シ多^タ
 加^カ比^ヒ加^カ流^{リウ}、比^ヒ能^ネ美^ミ古^コ、許^{コト}登^ト能^ネ加^カ多^タ理^リ基^キ登^ト母^ボ、許^{コト}袁^{エン}婆^ハ

○麻^マ岐^キ牟^ム久^ク能^ネ、比^ヒ志^シ呂^ロ乃^ノ美^ミ夜^ヤ波^ハ、纏^{マキムクノヒシロノミヤハ}向^{ムカ}之^ノ、日^ヒ代^{ダイ}宮^{ミヤ}者^{シヤ}

たり、是^{コノ}ハ景^{ケイ}行^{コウ}天^{テン}皇^ス、官^{クワン}所^{ショ}より、此^{コノ}より由^{ヨシ}縁^{エン}なり、^{ウケ}め
 たるを、^{ウケ}しりて、考^{カウ}了^{リョウ}ふ、此^{コノ}地^チ、朝^{チョウ}倉^{ソウ}、宮^{ミヤ}の近^{チカイ}邊^{ノヘ}、^{ウケ}なり

ふも、朝日互流、云云、夕附日、云云、まゝ朝日奈須目細
毛、暮日奈須浦細毛など、まゝ右の所以なり、

然るに、抄云、氣と、久と、音通せれば、日隠ふて、官殿
の高くれは、是子早られて、早く日の隠るを也、
風神祭祝詞子、夕日乃日隠處云々とあり、傳云、賀
氣流ハ、日影の刺るを、刺るなりて、陰みなるを
之、契沖、日影也と云て、其、引る祝詞に、日隠處と
あれども、隠るを賀氣流と云、云べくもあらず、
此ハ、此ハ、陰るを賀氣流と云、云べくもあらず、
此、壽詞を、右子引る、古訣等の如く、朝日、夕日の、物
に、早らば、よく、来向照る地を、云、倒み、くそ、あれ、日
の刺るなるが、何の憂き事ありん、又彼、風神祭祝
詞を、祝詞考、まゝ、解等の秋にも、日隠處と訓て、日
の、入、隠るを、思へる、云、なごも、此の比賀氣
流を、陰るを、加岐呂比とも、加氣呂布とも、云、
大の照るを、加岐呂比とも、加氣呂布とも、云、
い、う、ふ、心、得て、か、る、
燈、ふ、な、ご、の、言、の、を、も、皆、同、一、なる、その、を、や、

○多氣能泥能、泥陀流美夜ハ、竹之根之、根足宮にて、

動なりとも也、○許能泥能、泥婆布美夜ハ、水之根之、根
延宮なり、此、四句を、大殿祭祝詞に、此乃敷坐大宮地、

底津磐根乃極美、下津綱根、限、云、握堅多留柱とあり、
る、心、げ、く、の、壽、辞、なり、
ニ、余、志、ハ、八、百、土、と、云、に、志、の、助、辞、を、そ、う、た、る、也、
深、則、難、技、と、も、い、へ、り、
○夜、本、

八百と云、まゝの云を、よも、極の教、い、て、云、こ、を、ぞ、

抄云、土ハ、敷、以、て、云、づ、き、物、子、水、に、
を、許、多、並、べ、積、重、ぬ、
を、築、ゆ、え、な、る、づ、
を、五、五、務、と、よ、り、る、
大、土、を、よ、き、極、の、
大、き、と、ん、堅、り、た、る、
を、五、五、務、と、よ、り、る、
大、土、を、よ、き、極、の、
大、き、と、ん、堅、り、た、る、

○綾威言別
〇八之四十

又、助辞と云るもたうらうら、○伊岐豆岐能美夜ハ、伊

ハ、發語よて、杵築宮と云なうらうら、別に思ふ事もある、いと、例ある方に

依らう、平ラの 出雲風土記、出雲郡杵築御の處子、所造天

下、大神之宮將奉而、諸皇神等參集、宮處杵築、故云寸

付とあり、是柱根を築堅る也、玉垣を築也と云ハ、昨

そ、○麻紀依久比能美加度ハ、真木折檜之御門なり、

是に、檜と日との別あり、本ハ、日之皇子の、大座々宮

なれハ、日之宮、日之御門、日之宮人など稱へ来れ、

古語の有はらうら、其宮ハ、檜木以て造れ、バ、宮造の

上は、檜の方に取ても、云る也、されバ、真木割

け、け、け、檜之御門の事と心得、高貴

きききハ、日之御門の事、又さうても、大宮仕へお就

て、日之大宮、日之宮人など、もみ、もみ、皆日のをさ

ききき、此、冠辭考にも、是と云、これと

多つ、いまま、をさき、其他の祝も、○爾比那開

夜ハ、新嘗屋也、新嘗とハ、其年の新稻、新嘗の三言、也、

るを云名あり、即新稻饗の始、那と始、

又常小嘗を、亦開とのみも云ハ、其、稻を省き、に

て、新饗の始、此ハ、おと始、阿ハ、中間なる故、

なり、此、饗わき、萬葉、東國の、民歌にもとみ、元を

朝家のみみもあつて、下とまて、なつて為事なり、其

いゝく斎謹する状、神小祭るを主とし、其餘を

人小も饗、自もあつべし。也。今も東國、民ハ、九月、日待

の、縁日を以て、祝の饗するあり、此其、遺風にて、日

待としもあり、日、神を祭とし、詠なり、人、傳ふ、神を祭

るよをあり、これとて、後世となりて、踏祓大嘗

を、大嘗會といひ、毎年のを、新嘗會と、分ていへとも、古

は、通へしきて、回しするに、二の稱ありし也、其多ハ、記傳

お、委くあつられし。うめし、斯て、此ハ、新嘗屋と云る

は、後世の大嘗官の如く、建置れし別殿ふて、此殿、即

古への旧代、宮の、趾なりしあり、然らば、出て、上よ

この壽辞共ハ、皆此殿子、係れる也、諸注、何とも此意

を得たり、然れハ、旧代、宮と、長谷、百枝榎との、無隔ふ

を、後て、あつて、名吟を、いゝく認得し、より、もと百枝

榎ハ、其、別殿の御庭下、廣く、は、此、より、樹の

を、まて、盡ふ、ちりし、落葉の、ゆら、ゆる、あり、○淤比

陀互流ハ、生立有なり、○毛を陀流ハ、百足ふて、百を

多くの枝の、茂り、是れを、云、明宮、朝、大御歌ふ、毛を

知陀流、夜糸波、とある、処ふ、なり、○都紀賀延波ハ、榎

之枝者なり、今、えけ、やきの中、此、一種ありて、白け、や

きとも、きびとも、云、木也、と云り、此、は、の、り、上の、榎、弓、

條ふ、草木故を引てきり、又合けりし、此ふ、枝者エハと云
るを、先づ惣の枝をきり、其、枝者エハ云々と、次、上中下
の枝エハうらうらと、連ふ也、○本都延波ハ、最枝者ホツエハふし、
上枝なり、此、秀のきも、改ふきり、○阿米袁淋幣理ハ、
天を覆有なり、妙に、負天也と云くを、きりし、此を淋本
幣理アヘリと云へき、上古の活言に、淋幣理とハ、云るなり、
但本幣ハ、幣ヘと云く、天を覆ふと云、御殿を、天之御蔭、日
之御蔭と云如く、天の覆オホひとなきとなり、
の袖も云、○那加都延波ハ、中枝者エハ也、○阿豆麻袁淋
幣理ハ、東を覆有なり、此、歌に據て、按に、阿豆麻と云

は、明始の義にて、多、東方を指して云、詠なり、今此歌
ふ、大和國、泊瀬にして、東方を、阿豆麻と云る以て、
彼、倭建命、段の故事ハ、多、世の談辞カキコトありき、
づ、此、此、萬葉集の鶏鳴、吾嬬とある條ふ、委々
を、合せてよ、此、句抄ハ、泥ヌに、○志豆延波ハ、下枝
者ハ也、斯、毛都延モツエともよめ、右、上枝、中枝、下枝、
袁淋幣理ハ、鄙ヒを覆有なり、比那ヒナと云、隔ヘるの、謂イにて、
都ふ放サカる、國とハ、何處ナニみても云くを、云れと、此ハ、東
ふ對トて、姑ナく西の鄙ヒを、云くなり、

本居氏の、述之所の説も、兼ナぐりし、又解の、避奈菟
謎画の歌、款ニ云、比那ヒナと云、日没ヒふて、西ニより、比ヒをか

けて云と云ぬ、萬葉集中に、東南を指て、比那
るすあし、三重、嫁が歌に、阿豆麻にむうつて、比那
と云るも、阿豆麻ハ、東より南をかかて、比那
ハ、西より北をかかて、天と四方を云る言
と、阿豆麻ハ、上と云り、今按に、萬葉一、柿本朝臣長
歌に、天雨滿、倭乎置而、云、天難、夷者、雖存、石走、洪
海、國別とあり、此近江、國ハ大和より、東北に當り
より、又景行紀に、東十二道を指て、夫ともあれハ
こけりの坂を、
いづるなり、

とて大樹の陰に、遠く亘るに、何と云ふ景行、
段、御木、大樹、條ふ引けり、如くなれど、今此百枝觀を、
とけり、なる、大樹を、あつたれハ、唯方角を云る
のみあり、天と四方を、指るハ、天皇の御稜威に懸て、
是も此の、壽峰なり、○本都延能、延能、宇良婆波を、

秀枝之枝之末葉者なり、ホツエノエノウラバハ、末を、宇礼と云も、○那加都
延爾、エニオチフシラハ、中枝、オチフシラハ、落觸なり、布礼を、フレ
婆閉と云ハ、延て、ハタラ、活し、ハタラ、言なり、良婆閉を、ハ、切む
萬葉二に、上瀬尔、カミツセニ、生玉藻者、オムタマモ、下瀬尔、シモツセニ、流觸經、ハラバ
同、オチフシラハ、違つり、○那加都延能、ナカツエノエノウラバハ、宇良婆波を、
中、枝之、ウラバハ、枝之末葉者なり、○斯毛都延爾、シモツエニ、淋知布良婆
閉ハ、シモツエ、下枝、オチフシラハ、落觸なり、○斯豆延能、シヅエノエノウラバハ、宇良婆波を、
下枝之、シモツエノエノウラバハ、枝之末葉者なり、皆上の本都延能、ホツエノ、云々とも
ると同じ、カク、如此上、枝より、中枝、中枝より、下枝、云、送
れるを、樹、下、捧けける、大御蓋なつたれハ、木、葉の

鎮に流くを、防人の、別道をしむ人の、泣きやきて、
悲しみ洗むふ、誓つたるにこそ、ハ、あはれ、源氏帚木
に、衣の音なるきく、又、初音に、馬をかいたり
の、さめく、い、い、注み、さめく、い、い、さめく、い、い、
鳴きなりと云ふ、これら皆、重、衣なる以て、知つ
信し、鮮の、熟、秋も、たがへれど、此ふを得、ことと
に、

○美幣能古賀ハ、三重之子之にて、嫁自の事也、伊勢、

國、三重郡、三重御なるも、既ふさうり、其御の内、

糸女村と云ありて、其処、小初れる社もあり、四日市

杖衝坂の西北、五の南西 ○佐々賀世流ハ、指奉有なり、佐々

六丁許も有、サ、ガセル 流ハ、指奉有なり、佐々
置流と云を、又、延、い、い、指奉、い、い、い、い、い、い、

○美豆多麻宇岐ふハ、瑞玉、蓋ふにて、瑞も、玉も、美賞

言なり、記、上巻に、為、宇伎由比、而とありハ、蓋を宇伎

や、古語も、ありし、われど、此ハ、景行紀十八年八月、

到的邑而進食、是日膳夫等遺蓋、故時人号其忘蓋

處、曰、淳羽、今謂的者訛也、昔筑紫、俗号蓋曰淳羽、

筑後風土記に、昔景行天皇、巡國、既畢、還都之時、膳司

在此村、忘御酒蓋、云、天皇勅曰、惜乎朕之酒蓋、俗語

半、因曰、宇枳波夜郡、後人謬号生葉郡、な、い、い、い、

此故事を思ひ、い、い、也、其ハ彼、御時、膳夫等、い、い、

忘れ、い、い、を、い、い、御答なり、い、い、は、今、妾、御蓋に、

柳、葉の、い、い、を、い、い、奉、い、い、い、い、い、い、

つて、免許セ歸つとの、下心なうけらう、瑞玉盡との

ふふてま、燃つちうらうら、故ふ、初ふ纏向之日代宮者

とを、うらふ出づるものなり、此歌、色て斯るふしく

に、心をこりたる、次々の語をもに、合せて味をよへ

し、○宇岐志阿夫良ハ、淳し脂なり、古くを、酒をも、

阿夫良と云ける故ふ、そのを神代の初に、國稚如淳

脂、而多陀用敷琉之時、とあるに、此論て、これ壽輝の

根としとする也、酒を阿夫良とも云はるハ、和名抄

ハ、酒膏、佐賀阿布良と云る、江家次第に、大臣家、大饗、

條ふ、公卿等参集、於辨少納言座、飲謂之侍油云、

中、関白、御時、於細殿、有待膏、云々なる有、是、古き語

の遺れし、なうらうら、物語書ふも、油の如き酒をと

えるやうに、信に、物も、米の油の如く、其状も、油も似

しるものなり、うらうら、とて、此、句ハ、淳し脂の如くのを、

上、句ハ、此一句を隔て、るなるを、く、く、なるを、

○淋知那豆佐比ハ、落浸漬障、此を、柳葉の、酒

の上に、淳するを云、凡て此、那豆佐比、言ハ、水に

浮ふをも、沈むをも、漬るをもいひて、其、言の、本ハ、浸

漬み障る、とたるもの、明宮段、大御歌、那豆能紀、結とある

る下に、うらうら、其中に、淳ふを云る、例ハ、萬葉三

覆ひ、下^ツ枝ハ、西の鄙^{ヒナ}を覆ひ、天の御蔭^{ミカゲ}日の御蔭と
 なりぬ、故^コ其^ミ木^キ下^シみ、豊樂^{トヨノアカリ}ききしりす、今日^{イマ}も、妻^メ
 に大御盃^{オホミサカ}を執^トしめめつ、秀枝^{ホウエ}の末葉^{ウラハ}ハ、中^{ナカ}枝^エの落^{オチ}
 傳^ツひ、中^{ナカ}枝^エの末葉^{ウラハ}ハ、下^シ枝^エの落^{オチ}傳^ツひ、
 こを^コを^ヲを^シ、
 此^{コノ}三^{サン}重^{ジュウ}、子^コが指^サ拳^{ケン}する瑞玉盃^{ミツタマウキ}に、
 の日^ヒ代^ト、寛^{カン}朝^{チウ}に、あ^アり、散^{チリ}浮^{ウカ}ひ、
 るこそ恐^{オソ}ろくれ、然^{シカ}らハお見^ミと、此^{コノ}浮^{ウカ}て漂^{ヒラ}ふを、彼^{カノ}
 神代^{カムヤマト}に塩^{シホ}許^コ袁^ヲ呂^ロ許^コ袁^ヲ呂^ロ畫^ニ鳴^ニ鳴^ニ、
 状^{カタ}も侍^{サマ}れハ、國^{クニ}の根^ネ也、
 と終^ハふ汝^ニが命^ノの天下^{テンカ}所^{シヨ}治^チ吉^{キチ}祥^{シャウ}あるもきる、
 か^カく^クを^ヲ、已^イふ過^{アヤ}失^{マチ}を^ヲ、
 と^トなり、其^{ソノ}心^{ココロ}深^{フカ}き、
 免^メて^テた^タを^ヲ、
 後^{ノチ}文^ヲ云^{ハク}、故^{コノ}獻^{ケン}此^{コノ}歌^カ者^ノ、故^{コノ}其^{ソノ}罪^{ツミ}也、又^{マタ}於^ニ此^{コノ}豊^{トヨ}樂^{ラク}、
 嫁^メ而^{シテ}給^ル多^タ祿^{ロク}也、
 とあり、
 決^{ケツ}、
 其^{ソノ}七^{ナナ}、
 不^フ、歌^カ、神^{カミ}と^ト、
 つき、
 神^{カミ}妙^{タマシ}、
 兩^{フタ}大^{オホ}后^{キサキ}歌^カ之^ノ、其^{ソノ}歌^カ曰^ク、

か^カく^クを^ヲ、已^イふ過^{アヤ}失^{マチ}を^ヲ、
 と^トなり、其^{ソノ}心^{ココロ}深^{フカ}き、
 免^メて^テた^タを^ヲ、
 後^{ノチ}文^ヲ云^{ハク}、故^{コノ}獻^{ケン}此^{コノ}歌^カ者^ノ、故^{コノ}其^{ソノ}罪^{ツミ}也、又^{マタ}於^ニ此^{コノ}豊^{トヨ}樂^{ラク}、
 嫁^メ而^{シテ}給^ル多^タ祿^{ロク}也、
 とあり、
 決^{ケツ}、
 其^{ソノ}七^{ナナ}、
 不^フ、歌^カ、神^{カミ}と^ト、
 つき、
 神^{カミ}妙^{タマシ}、
 兩^{フタ}大^{オホ}后^{キサキ}歌^カ之^ノ、其^{ソノ}歌^カ曰^ク、

○稜威言別

夜麻登能、許能多氣知尔、古陀加流、伊知能都加佐、爾比那
閑夜爾、淋斐陀互流、波毘呂由都麻都婆岐、曾賀波能、比呂
理伊麻志、曾能波那能、互理伊麻須、多加比加流、比能美古
爾、登余美岐、多豆麻都良勢、許登能加多理其登母、許袁婆

○夜麻登能ハ、倭之なり、○許能多氣知尔ハ、此高市

ふなり、高市郡を、之に昨す、人の群集して、賑ハつる

地を、高市と云くを、既に云はるるあり、神代紀に、會

八十萬、神於天、高市とあるを、郡名の高市も、

之を都會の名ともあり、此ハ朝倉宮の地を詔ふ也、

○古陀加流ハ、所木高、み、彼、百枝榎の、高きを指す也、

爾比那閑夜と、續けりて、以て云々

抄に、所木高なり、今一つ加字、あるべきなれど、無
きハ、古歌の習也、と云くハ、
高きハ、水、平、地、の、高き、地、なり、契、仲、も、師、も、水
高、なり、と云れ、
許を書て、古をかく、
ハ、泥、
心、
信、
の、心、
○伊知能都加佐ハ、市之堆なり、都加佐、
き地を云、土加佐の義、
と云に、合せて、

也、塚と云ふも、同族のと思へども、されハ官、司を、都加
ハ、葉と云言の、流けるなる。こし、されハ官、司を、都加
佐と云も、堆の、高低をよくあつたに、此、比喩なるも、官
司が本にて、云はるをあらうと云ふ。萬葉に、野豆可佐
と云も、涯之官ともいふ。こし、腕の蓋を、加佐といひ
て、蓋、瘡も、其形、相似し、ハ、中のふくれより、故
の名な、こし、又、船、馬に、荷、加佐と云、教も、准へ
る。○雨比那閉夜尔ハ、新嘗殿みと、上の歌なると
あれ。○淤斐陀豆流、波毘呂由都麻都婆岐ハ、生立
る、葉廣五百筒葉椿、麻と、婆とハ、音常、みと、既に高津、
宮、大后、歌に出、此ハ、上の、嫁の、歌に、百枝、樹をよみ
し、故よ、その、ほり、なりし、椿と云て、壽きりふなり

む、○曾賀波能、比呂理伊麻志ハ、其之、葉之、廣坐なり、
○曾能波那能、豆理伊麻須ハ、其花之、照坐なり、以上
四句を、彼、高津、宮、段に出、但、彼、段、少は、斯賀波那能、
豆理伊麻斯、芝賀波能、比呂理伊麻須波と有、○多加
比加流、比能美古尔ハ、高光、日皇子ふに、上なると
同し、○登余美岐、多豆麻都良勢ハ、豊御酒令獻なり、
此二句も、神代、須勢理毘賣命、御歌に出、此ハ、上に比
能美古爾とあれハ、獻とと、人ふ仰せたりなり、
○許登能加多理基登母、許袁婆、此二句も、上注の如
し、一、卷、いづ、

○一音の惣之を、倭の此、皇都ふして、名高き柳の、其
木高うる、都の官の、新嘗殿のほくらに、生立る葉廣
五百箇葉椿と、其葉の如く、漲り榮え坐し、其花の
如く、照る榮え坐し、日之皇子に、豊御酒獻とともなり、

即天皇歌曰、

此ハ、此、御時の御歌とをきこえり、此、御時も、御歌な
くても有へり、ゆを、其御歌ハ、脱て、其翌日、后妃等
の御宴し、後ふを、別殿より、思しやりて、いよせ給ふ
が、此、よへしなむ、

毛々志紀能、淋富美夜比登波、宇豆良登理、比禮登理加氣、
麻那婆志良、袁由岐阿閉、雨波須受米、宇受須麻理、章且祁、
布母加母、佐加美豆久良斯、阿須毛加母、佐加美豆久良斯、多

加比加流、比能美夜比登、許登能加多理基登母、許袁婆、

○毛々志紀能ハ、百敷城之みて大宮とつる、枕詞なり、
毛々とを、牟久佐加、木丘開、蒼茂などの、牟、茂の重
れるにて、甚昌なるをえ、一ツの語あり、百足、百襲よど
えるも、牟昌なるを、敷の百も、其より一ツの言とあり
し、
敷ハ、太敷宮子よどえ、敷、城ハ、大宮、御
構ひをえ、し、を、百敷城之と、えつるなれど、紀の同
言の重なる故、一ツ略ること、旅人を、多毘等と、えり
如し、

冠辞考云、萬葉一に、百磯城之、大宮處と書ふ、此字
みて、皇、大城の堅きを、石ふたとへて、百の石城の

人も掛しるハ、縫殿式ノ、中宮料の、領巾四條料、紗三丈六尺、別九

又、もろろく、又此を振、こを、下の欽明紀、哥に、か

らふのきれ、ふしおほむ、こを、比例甫囉湏

母、云、萬葉五に、麻都良我多、佐欲比賣能、故何、比例

布利斯、云、なまこの如し、但、此等ハ、必しも、領巾ハ

局カキら傳、もにまれ、袖ハまれ、招くハ、其、振物ハを指、て、

比例布留ハと云、之しにも有、く、名義ハ、振考ハのよし

うとも思へ、と、魚の鱸ハも、同し言、なれハ、凡て、打振物

を云、形、く、俗子、比良ハ、比良ハ、希久ハ、と云、も、其、よ

記、上巻ハ、蛇比礼ハ、吳公比礼ハ、蜂比礼ハ、中巻ハ、天之日ハ、予ハ、

糸、切浪比礼ハ、切風比礼ハ、な、く、も、多、其、を、撰ハふ具

の、な、れ、バ、あり、○麻那婆志良ハ、學柱ハ、み、鶴鶴ハの

一名也、紀、一書云、陽神先唱曰、美哉善少女、遂將合交

而、不知其術、時、有鶴鶴飛來、搖其首尾、二神見而、學之

即得交通、と、ある、舊辭に、據、れ、名也、和名抄ハ、鶴鶴

和名、尔波久奈布理ハ、を、ある、も、靈吳記ハ、合交ハを、久那

加比ハと訓、る、意の名にて、此と、同し、也、ま、止豆ハ、木

乎之閉止里ハとある、も、右、舊辭ハ、依、れ、る、名也、又、此ハ、

依、て、い、れ、お、ほ、せ、と、云、も、記、小、伊邪那岐、命、云、云、汝

身者如何成と、互に、問交ハ、て、羨斗能麻具波比ハ、為、乃、

○稜威言別

名なかりし、既レ難語考に、云レは、うめし、○袁ヲ由ニ岐キ阿ア
 閉ハ、尾ヲ行キ令ヘ合アなり、尾ヲとを、官女ノ裳モ襪ソを云、由ニ岐キ阿ア
 閉ハ、行キ令ヘ合アなり、裳ヲを引テ、相ヒ並ニ連ツなるを云、其レを
 尾ヲと云んる、打マりて、言ハはあしざれと、上ノ御
 句ニ、領ヒ中レ掛ケる形サ詔ヲを、鶉ノ項ク毛ゲに、比タ喻トをせしむ
 因ニふ、裳モの後レ方ハをも、鶉ノ後レ尾ヲに、譬レへし、古語
 の自在ニなる程ヲを、思フく、○雨ニ波ハ須ズ受ズ米ノハ、庭ニ雀メ也、
 平地ニふも、降オリ来ル鳥ヲゆゑに云て、庭ニ鶉ノ庭ニ鳥ノ等ノの庭ニふ
 日シ、是レも次ノ白レ比ヲ、序ナり、上ニ二ツの例ノ出トし、
 ○宇ヲ受ズ須ズ麻ヲ理リ章ヲ豆ヲハ、群ヲ統ス居リ而シなり、宇ヲ受ズハ、群ヲ集ク小

虫ヲを、宇ヲ受ズ虫ト云、是レ也、の、名、な、り、記、し、宇、士、多、加、
虫、音、通、れ、ハ、奉、群、集、小、出、
礼、と、又、須、と、都、と、通、り、云、れ、バ、禹、豆、麻、佐、の、禹、豆、と
ち、
 同意ナる、次、雄ノ畧ヲ紀シ、奉テ獻ス庸ノ調ヲ絹ノ縑ノ充テ積ス朝ノ庭ニ、因テ賜ス
ナ、イ、ウ、ウ、ヅ、マ、サ、ト、一、云、禹、豆、マ、利、麻、佐、
姓、曰、禹、豆、麻、佐、皆、盈、積、之、形、詔、也、
是、ハ、世、ふ、う、げ、り、う、げ、高、き、貴、を、訓、う、げ、館、な、と、云
を、又、れ、ハ、サ、し、別、なる、う、と、も、思、へ、と、此、江、戸、地、に、て、
彼、う、げ、館、の、表、看、板、に、
倉、海、ふ、て、微、小、き、貝、の、合、集、れ、る、状、なる、を、う、げ、貝、と
云、る、な、ど、を、以、て、思、へ、バ、何、と、相、近、き、詔、と、ち、ゆ、須、麻
理、ハ、紀、小、五、百、箇、御、統、和、名、抄、子、昂、星、な、り、統、に

己に上に、さして此、宮人ハ、宮女等も指して、詔するなり、

○許登能加多理基登母、許袁婆、此二句と、上をぬれ

し、

○一首總のまゝ、百敷城之大宮に奉仕る、後宮女等

を、彼新嘗殿に、鶉鳥の如く、領中より、掛

后妃の際に人申せとも、酒宴に、鶴鶴の如く、裳襪

並に召ふ時ハ、領中掛、今を、酒漬遊

を引列ぬ、庭雀の如く、群纏、今日を、酒漬遊

たの、明日も、酒漬きあそぶ、樂しむらし

と、三つ此鳥の御比喻、いせ

後文云、此三歌者、天語歌也、
以て、名付け、なり、傳へ、餘語歌なり、三歌皆
終に、許登能加多理、其登母、と云く、初、天上の歌へ
る、詠なれハ、也と云く、然れとも、初、天上の歌へ
は、ふも、此名なり、又一卷、五首の、許登能加多理、其登
母云々の奇にも、此名なり、ハ、おちつ、うれし、
ハ、餘事にて、神樂の直會と曰く、宴の餘無に多く、歌
ひし、故、然ハ、云
る、ふも、也、あ、ん、
是豊樂之日、亦春日之袁杼比賣、獻大御酒之時、天皇歌
曰、
是、豊樂之日とハ、上の三重嫁の獻るし、日め、
春日ハ、上注に出、袁杼比賣ハ、上文に、九遍之佐都紀
臣之女、袁杼比賣と云、傳ふ、これハ、嫁に、
是と、嫁と云、その、その、下、
あ、え、ら、
危く、所念て、よ、み、ま、
御歌なり、

○稜威言別

〇八之五十九

美那曾々久、淋美能袁登賣、本陀理登良須母、本陀理斗理、
加多斗良勢、斯多賀多久、夜賀多久斗良勢、本陀理斗良
須古、

○美那曾々久ハ、水潛にて、魚と續々、此ハ、其、字袁
を、於と約、て、淋美とを係、る也、此、既、小、度々、之、つ、
傳、上、の、曾々、久、の、久、の、韻、字、に、長、く、引、て、韻、へ
は、久、字、於、と、なる、其、字、於、ハ、袁、と、切、れ、ハ、お、の、既、の
ら、魚、と、ヤ、ゆる、なり、と、云、へ、れ、と、い、と、迂、遠、なる、秋
なり、此、を、記、紀、中、の、右、読、の、連、き、の、已、立、する、後、に、
違、ふ、の、多、う、る、を、於、ら、ハ、さ、ん、と、し、引、廻、し、する
を、指、て、詔、つ、る、也、臣、は、凡、て、官、位、人、を、さ、る、に、就、て、
○淋美能袁登賣ハ、臣之孃子にて、此ハ、即袁杼比賣
を、指、て、詔、つ、る、也、臣、は、凡、て、官、位、人、を、さ、る、に、就、て、

云、稱、な、れ、バ、男、ハ、更、なり、女、を、も、え、り、此、も、上、注、に、出、
○本陀理登良須母ハ、秀樽取もなり、詔文に、尊、注、酒
器、と、あり、尊、樽、樽、同、此、方、み、て、多、理、と、云、物、も、古、は
酒、を、注、く、器、なり、故、に、此、字、を、當、する、也、名、義、ハ、岳

ふ、て、其、口、より、酒、の、垂、出、る、よ、し、なり、ん、
子、鉦、子、な、と、を、用、る、如、く、用、い、り、し、器、なり、然、る、に、
後、世、ハ、を、樽、ハ、酒、を、入、置、器、と、なり、て、注、器、ハ、水、瓶、に、
又、瓶、子、ハ、和、名、抄、に、味、と、あり、て、古、ハ、酒、を、注、く、
器、に、之、非、に、鉦、子、ハ、佐、之、奈、閑、と、あり、て、酒、器、に、之、非
ず、然、る、に、此、二、後、世、に、を、酒、を、注、く、器、と、なる、皆、古、
と、後、世、と、其、形、も、用、い、る、ま、も、う、け、り、更、れ、る、なり、と、
て、今、世、に、多、流、と、云、を、根、を、も、古、ハ、多、理、
木、と、云、し、を、後、世、ハ、多、流、木、と、云、類、也、と、有、秀、ハ、此、也、
大、キ、ナ、ク、も、也、登、良、須、ハ、例、の、取、を、延、へ、る、言、母、ハ、歎

息の辞なり、○本陀理斗理ハ、秀罇取なり、此句ハ、上
を重ぬて、調べの爲に、副吟ふるなれど、秀罇取あり
は、と合して、次へ連れし得し。

傳に、此より嬢子を賛て、誠りたまふ御詞ありと
えれど、賛る意ハ、見えん、あり、堅固に取持て、落
それ、酒を溢れ、それと、詔
ふの、いにこそあり、

○加多久斗良勢ハ、堅固く取也、此、加多久ハ、此、奏
の上なる歌に、飲衰枳跡尔、柯拖俱、都柯陪、麻都羅武
騰とある、柯拖俱と、同意あり、怠う守、慥に物よる
こなり、○斯多賀多久夜賀多久斗良勢ハ、慥堅彌堅
と令取なり、斯多ハ、斯多々加と云、詞あり、多斯加と

云を、勵く云、諸なり、夜ハ、彌の上略にて、きつうに

堅く、彌固く取れと云ん、うめし、良勢の、既に此、

傳云、下堅く、上堅く取れ、宇波ハ、和と切れとも、
通ハ、して、夜とも、上り、屋も、上の、又、い、や
かうへと、上り、上が、上り、と、ま、あ、と、なり、
今、按に、下堅く、然ても、あ、上堅く、の、叙、ま
り、て、す、え、と、両、手、を、上、下、と、な、る、べ、り、れ、ど
も、其、も、お、ほ、つ、う、れ、と、又、上、を、夜、と、え、へ、く、も、お、ほ
え、れ、屋、も、上、屋、の、義、に、こ、え、あ、れ、上、の、み、て、ま、
何、物、の、上、と、も、す、え、分、れ、ど、又、い、や、う、へ、と、え、も、
盃、お、上、の、こ、な、り、俗、言、ふ、夜、賀、宇、南、と、者、き、て、え、
以、て、新、く、此、説、を、い、ち、れ、る、の、こ、多、う、り、
○本陀理斗良須古ハ、三、句、の、本陀理登良須母を、一
言換て、再い返し、ゆふなり、

○一篇のこハ、今日の豊樂に、仕奉る臣の嬢子、表行

が、かゝらぬきふし、秀樽取れも、やよ秀樽取る
 なるば、甚堅固益堅固取て、勿過そ、莫落そや、其秀
 樽取れ子とと也、

此、御奇の事、抄ふど、ハ、云に、是、ねハ、とし、おき、傳
 の徳、叙に、云、や、此、奇の、一、首の、を、ハ、表、行、比、賣、
 が、大、御、盡、に、盛、る、べき、御、酒、の、樽、を、執、り、
 儀、の、正、し、く、美、麗、き、を、見、る、な、し、感、て、賛、稱、賜、へ
 り、ふ、て、樽、の、下、上、を、堅、く、取、と、と、詔、ふ、を、い、よ、く、淨
 き、心、を、以、て、勤、り、て、よ、く、仕、奉、せ、勿、懈、を、そ、と、樽、を
 取、に、託、て、扨、て、仕、奉、る、を、誠、め、賜、つ、る、なり、と、
 附、そ、く、れ、と、と、を、ま、く、と、あ、り、と、あ、り、い、
 て、誰、も、き、く、し、べ、り、れ、と、今、年、へ、
 此、者、宇、岐、歌、也、と、り、傳、ふ、淳、歌、な、る、ん、と、云、ふ、是、も
 り、の、也、此、を、彼、甚、堅、く、益、堅、く、取、と、と、珍、し、御、詔、に

就て、盡に酒を注ぐ時、
 は、云、る、に、と、と、

爾袁村比賣獻歌其歌曰、

此ハ、此時の奇に、水、按、に、此段の上文に、天皇
 丸通之、佐都紀、臣、之、女、袁村比賣、幸行于春日之時、
 之、を、見、し、其、後、大宮に、使、さ、り、て、使、ひ、
 され、其、間、天皇を、患、奉、て、よ、り、る、奇、なり、此、等、を、以、
 ても、此、表、村、比、賣、ハ、嫁、に、あ、り、
 記、の、上、文、以、て、思、ふ、に、臣、の、人、の、女、故、不、
 登、賣、と、詔、ふ、なり、
 多、い、な、れ、ハ、更、に、こ、を、見、る、也、
 表、に、委、と、云、を、
 己、合、に、
 夜、須、美、斯、志、和、賀、湫、富、岐、美、能、阿、佐、斗、爾、波、伊、余、理、陀、多、志、
 由、布、斗、爾、波、伊、余、理、陀、多、須、和、岐、豆、紀、賀、斯、多、能、伊、多、爾、母

○稜威言別

〇八之六十一

近づく奉らるるものを、あはれ其板の、吾兄よ、汝が幸
こそ、羨しくれとなり、氣どりく愛きうとなり、
此者志都歌也とあり、己に高津宮、朝に出、これを見よ
調子に、つゞく名也、

亦一時天皇遊行到於美和河之時、河邊有洗衣童女、其
容姿甚麗、天皇問其童女、汝者誰子、答白己名謂引田部
赤猪子、爾令詔者、汝不嫁夫、今將喚而遷坐於宮、故其赤
猪子、仰待天皇之余、既經八十歲、於是赤猪子以為望余
之間、已經多年、姿體瘦萎、更無所恃、非顯待情、不忍於
悒、而令持而取之、机代物、參出貢獻、然天皇既忘先所命

事、問其赤猪子曰、汝者誰老女、何由以參來爾、赤猪子答
白、其年某月、被天皇之余、仰待大命、至于今日、經八十歲、
今容姿既耆、更無所恃、然顯自己志、以參出耳、於是天皇
大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚愛悲、
心裏欲婚、憚其極老、不得成婚、而賜御歌其歌曰、

美和河ハ、初瀬川の、一流なるを、三輪にてハ、三輪川
と云ヒ、ちり、美和の、既不出、引田部ハ、式に、大和、
國城上、郡に、曳田神社あり、此地に因、姓なり、
天武紀に、三輪、引田、君、雅波麻呂、持統紀に、引田、朝
臣、廣目、なると、姦り、後、いとも、此姓、乃、ちり、而取之
机代物ハ、百と、数々の、飲食の、物實を、云、詞にて、取ハ、
取、有、なると、取、机ハ、坏居の、義也、故、机代物ハ、即、其、机に
立て、饗、さる、真鳥野、菜の、美味、物を、云、て、此、子、経、ハ
十歳、とあり、此の、年紀に、合、れハ、世、の、學者、一、向
の、浮、説と、云、ま、は、じ、とも、如此、唱和、奇、四、そ、も、あ、じ、ハ、

○稜威言別

此ちしごやにま有べうに、記に、天皇御年壹佰貳拾肆歳とあるに依り、幸もあつたれと、是も依り、紀の六十二歳も叶ハハ、舊事紀に依るとも、りし叶ハむうと、思ふもあせと、此ふを治るしが、よし、古き代のすなれハ、あれうち、紀年を頼て、捨へきに依り、假令書紀の紀年よりとも、此赤猪子が、四十歳の時のすと云れハ、妨もあらず、此も按むるに、萬葉、用巻に、流瀬朝倉宮、御宇天皇代、天皇、御製歌、龍毛世、美龍母乳、云々して載る處女ハ、若、此赤猪子の故事の、一説にあり、するに、此書文に、一時、天皇遊行とあり、彼、龍毛世の御歌も、ふと近はより、遊ん行坐て、處女によみかけを移し、ま也、ま、天皇向、其童女、汝若誰子、なるとあると、彼、御歌に、家告用、名告、沙根と、よみ移る、とも、いとよく似て、但、河邊と、岡邊と、洗衣と、摘菜とのたういもあれ、其を、紀、一書の類んと云れバ、是、一ツ根の故事とおぼしめて、たのし所、ある、ちふんしけ、

美母呂能、伊都加斯賀母登、加斯賀母登、由々斯伎加母、加

志波良衣登賣

○美母呂能ハ、御諸之より、神社よ生繁し、諸樹を、
 云、稱なりけしハ、古書にも、御諸と書るが、正字なり、
 後世の人ハ、御室の音轉也と、思ふりごと、宮殿ハ、後
 のゆにて、上代ハ、出雲、伊勢、皆森なりし、鐘の響初
 卷、神離、條ふらうの如し、其ハ、本ハ、何この神社に
 とも、稱もく、こやなう、重き神社の稱の如くなり
 て、大三輪を、專と申、次ハ、飛鳥、龍田をも、萬葉集、せり
 稱なり、按に、此も其祭祀の嚴うなる故のこなり、
 其、森の名細、うし故とも、此、此を大三輪を、指

乃ち上注に引うめく三輪ハ、引田部の本居
とは也、萬葉三に、吾屋戸余、御諾乎立而、なと云々
と云いて、即是神難也、此
○伊都加斯賀母登ハ、嚴櫃
之本なり、伊都ハ、伊豆能賣の伊豆と同一く、忌清り
て、齋くを云、祝詞に、伊豆幣、伊豆毫なりと申ヤ、是也、
常に、伊都某と云るとも、別也、都を過りて、唱ふは、母
登ハ、天智紀ハ、謨騰期登、波那波佐開騰母といゆる
類なり、多く、女のことなり、垂仁紀に、以天照大神、
鎮座於嚴櫃之本、而祠之とあるを、其樹下を云々に
て、今これを異なり、○加斯賀母登ハ、上を重ぬて、調べ

を助るハ、古き歌の常なり、是ハ如此重ぬて、深く
驚うせ給ふは、なり、なり、此、まて、次の言を詔ん
じりの序也、○由々斯伎加母ハ、忌々々々、裁みて、彼、
神本とて、嚴に齋祭る櫃の、甚く忌み謹
を、先契を忘れ給ふは、吾御忌に、うらうらと詔ふ也、
即前文に、徒過盛年、是甚愛悲とある、此意也、まて上
りり係るを、萬葉に、水綿懸而、忌此杜、云々三
幣取、神之祝我、鎮齋杉原、なとのを也、下へ受うると
ハ、挂卷文、忌之伎鴨、まて言卷毛、齋忌志畏之、是ハ、忌
方ふれ、なと、何し、まて、此を、悔驚きと、悼
やも

○稜威言別

み思む方に詔ふ也、從此、忌^{ユキ}しと云くや、斎^{イハヒ}謹^{ツツシ}む方
より、忌^{イハヒ}悼^{ホカ}る方に云^ト傳^{ツク}し、終^{ハシ}ふを、善^キ悪^クきに
て、甚^シしきにもなる、今^{イマ}、誰^{タレ}も知^チれる事^{コト}なれハ、妻
くも云^トさる也、

傳云、神社の樹を恐みて、忌悼る由の故、けなり
云云、さて此の御歌の意、前記に、悼^{ホカ}其極^{キョク}老^{ロウ}と云
るをみて、甚^シしく老^{ロウ}容^{ヨウ}顔^{ガン}の悼^{ホカ}らば、婿^{ムコ}ふ不^フ
忍^{ニガ}し^シな^ラと云るを、い^ハし^シき^キい^ハう^ウ也、此^{コノ}を天^{テン}
皇^{ミコ}既^スく先^マの契^ケを忘^ワれ^レ給^{タマ}ひて、徒^タに赤^{アカ}猪^{イノ}子^コが身^ミの
盛^セを過^スとしり給^{タマ}ひ、吾^ガが御^ミ憐^レを、おと^トり^リき
悔^クて、詔^{ミコトノコト}ふ御^ミ記^キあるを、右^{ミダリ}
注^{ツキ}に云^トが如^カくあるを、
○加^カ志^シ波^ハ良^ラ袁^{エン}登^ト賣^メ、檀^{カシハラ}原^{ヲトメ}處^{ヲトメ}女^メにて、此^{コノ}老^{ロウ}女^メう、生^ナま^シ
地名^{チノナ}なるに、上^{ウヘ}の序^{ノリ}も、檀^{カシハラ}以^ヨてた^タとく、さ^サを給^{タマ}ひ

しな^シら^ラし、然^{シカ}る傳^{ツク}云^フ、白^{カシハラ}檮^ヲ原^{ヲトメ}ハ、即^チ上^{ウヘ}の嚴^{イツカシ}白^{ハク}檮^ヲの生^ナ
づる處^{トコロ}を云^フて、御^ミ白^{ハク}の意^イを、甚^シしく老^{ロウ}容^{ヨウ}顔^{ガン}の忌^{ユキ}々^々
しく悼^{ホカ}ら^ラし、こ^コを、嚴^{イツカシ}白^{ハク}檮^ヲの如^カき媛^{ヲトメ}女^メと詔^{ミコトノコト}ふ也、
さて老^{オウナ}嫗^{ヲトメ}を、少^{ヲトメ}女^メと詔^{ミコトノコト}ふ、^{ノサ}誓^{チカ}ま^シけ^レ、^{オモホシ}所^{トコロ}念^{ネン}
看^メふ就^スての御^ミ歌^カなれ^レハ、上^{ウヘ}に、是^{コノ}又^{マタ}い^ハひ^ハし
き^キい^ハう^ウ也、檀^{カシハラ}ハ、彼^{カノ}鎮^{チン}座^ザ嚴^{イツカシ}檀^{カシハラ}之^ノ本^ホ、而^{シテ}祠^{ヒコ}之^ノ本^ホとある
類^{ルイ}の、神^{カミ}木^キを詔^{ミコトノコト}ふ序^{ノリ}に、^{ヲトメ}媛^メ女^メ、其^{ソノ}檀^{カシハラ}の本^ホに
生^ナじり^リと云^フに、^{ヲトメ}又^{マタ}少^{ヲトメ}女^メの詔^{ミコトノコト}も、い^ハを
り^リし、^{ヲトメ}是^{コノ}て男^{オトコ}女^メの稱^{ナヅケ}ふ、宇^ウ那^ナ為^ミ、波^ハ那^ナ理^リ、和^ワ良^ラ波^ハ、阿^ア宜^イ
麻^マ伎^キ、袁^{エン}登^ト賣^メ、米^メ邪^{ジャ}志^シ、袁^{エン}登^ト古^コ、袁^{エン}美^ミ那^ナ、^{ヲトメ}是^{コノ}類^{ルイ}ハ、本^ホ、皆^{ツケ}

髪カミの形カタチより云イハ、秘ヒなる中に、表ウラ登ノボ賣ウを云イハと未メ人の妻メノをなナりたるむとの結ユひ状サマにて、後ノチ世ヨの鳴ナ田タと云イハ、結ユひ状サマの如ニくなりけり、此事コト、委ウくハ、古コ代ノ髪カミ、考カウと云イハ書シヤに出イつ、此コノ時トキ赤アカ猪イノ子コ、彼カノ大オホ命ノミに、汝ニ不フ嫁カ夫トと詔ミコトらし、御ミコト訶カを重オモみして、髪カミハ猶モト、所シヨ看ミし、昔ムカシの随ツの、表ウラ登ノボ賣ウにてありし故ユにこそあれ、萬マン葉エフ之ノに、人ヒト皆ハ、今イマハ長ナガしと、たけと云イハと、君キミ見ミ之ノ髪カミ亂カミふりとも、此コノ歌ウタに合アはるとも、思オモふて、抑オシ八十ヤソ歳トシと云イハると、文フミ華ナあると、老オシ瘦シヤ萎カたる姿サマにて髪カミを、表ウラ登ノボ賣ウに結ユひ居アりし猶モト状サマを見ミるれしは、いかに痛イタまゝ、悲カナし、いかに由ユく

斯シ伎キ加カ母モを詔ミコトしけるを、此コノ故ユなるそ、

○一首イツのまゝ、神カミの御ミコト諸モロに、取ヒりき御ミコト魂タマ代ノ、神カミ木キと

育イクふ嚴イツ櫃カンハ、木キ綿ユフはけ、標シラうけ、

あゝ、其コノ忌ニを、あやまらるる、な

うれ、吾アハ昔ムカシの契チ約キリを忘ワれは、可ア惜タラ身ミの盛イを、徒タラ

になし果ハ終テ、今イマ日ヒ如カクいとは、悲カナし、處トメ女メの

姿サマを思オモふ、若ニしきよを、

とし老オシふを、忌イ嫌カラひて詔ミコトふとせハ、赤アカ猪イノ子コに、耻ハ

を、えせ、此コノ時トキに、あやまりて、さるる、御ミコト心ココロのま

又マ歌タ曰イハ、

○稜リョウ威イ言ゴン別ベツ

比氣多能、和加久流須婆良、和加久閑爾、韋泥豆麻斯母能、
淋伊爾祈流加母、

○比氣多能ハ、引田之よて、大和國、城上郡也、前文の注に

○和加久流須婆良ハ、若栗栖原なり、此老嫗の御の、

引田邊に、栗栖のありに因て、如此、此、けりよあり

ん、是よ合て、上、哥の檀原處女も、其木の在し地ま

る、しるを知らず、も、此句まてハ、次の和加久閑を

詔ん、よて、序也、序なう、如此、他、よりハ求、けり

皆其人に、因ある物以て、けり、けり、ち、此、勝れ

る、地なり、傳之、栗、柑を多く植生し、る地を、栗栖

と云、處々、地名にも、栖ハ、い、ゆる意けり、此木に限

る、ところ、他、木、ハ、其、原、其、園、其、生、な、と、ハ、未、思

は、得、れ、と、ち、り、今、按、に、古、ハ、栗、栖、と、云、ハ、栗、の、み、よ

は、限、ら、れ、梨、柿、桃、楊、梅、柘、榴、等、の、一、切、比、菓、樹、附、け、る

芋、大根、牛房、瓜、茄子、等、の、畑、津、物、を、相、兼、て、出、に、地、を、

え、し、故、よ、栗、栖、と、云、地、の、処、々、に、ま、う、る、ち、り、其、木、小

右、記、に、六、月、朔、日、從、拍、栗、栖、獻、瓜、三、種、な、り、に、野

菜、又、枇、杷、楊、梅、等、の、よ、を、云、う、る、記、録、よ、れ、う、じ、見

ゆる、を、以、て、知、之、り、か、れ、ハ、古、く、ハ、一、切、の、菓、を、總、

て、栗、と、云、し、な、う、し、今、世、に、一、切、の、物、の、實、を、桃、と

兩赤猪子之泣淚、悉濕其所服之丹搯神、答其大御歌、而

歌曰、

右の懇切なる、大御哥を蒙れる、喜し涙に、袖をさか
りたるなり、丹搯ハ、菑、赤土と、未だ搯引る
を云、搯衣のハ、既に高津宮、段に出、古へ青搯
りぢ搯、遠山搯、あとも有るに、此時丹搯の衣をし
を着て、参上り、髪を、表登賣、小結んてありし故
なる、初、伊都加斯賀母登の、
大御哥の和、う、あ、
美母呂爾、都久夜多麻加岐、都岐阿麻斯、多爾加母余良余、
加微能美夜比登、

美母呂爾、都久夜多麻加岐、都岐阿麻斯、多爾加母余良余、
加微能美夜比登、

○美母呂爾、都久夜多麻加岐ハ、御諸尔、齋や靈籬に
て、夜ハ、宇都夜阿良礼、ま、い、ゆる、拍子の夜あり、

靈籬とも、上、御歌の、嚴櫃に對て、神、御魂の鎮る、

森の諸木を指て、える、あり、上代ハ、大、の

神社、今の三輪山の如く、森あり、に、齋祠

を、神籬と書、赤れる、ま、と、以て、知、し、此、等、の、も、鏡

の、御考、此、初春に、赤へ、泣、見、ハ、此、ハ、も、其、一、鴻、を、か、

か、つ、え、あり、

を、神籬と書、赤れる、ま、と、以て、知、し、此、等、の、も、鏡

の、御考、此、初春に、赤へ、泣、見、ハ、此、ハ、も、其、一、鴻、を、か、

か、つ、え、あり、

○稜威言別

ほろん、いほと因コあつて、取出ツまゝにあつて、○伊理イリ
延能波知須エノハチヌハ、入江之蓮ハナハチヌなり、○波那婆知須ハナハチヌハ、花ハナ
蓮ハナなり、抄云、花橘、花薄ハナハチヌまといはれり、今按に、
そりらの類ルの、又字鏡に、權波知須ハナハチヌ、まともある如
く、そのうみ草木の花子、波知須ハナハチヌとい名ありし、
蓮を取分て、花蓮ハナハチヌといヒしハもクし、○倣結佐加理ミノサカリ
毘登ヒトハ、身之盛人ミノサカリあり、詞ハ、花蓮盛ハナハチヌと續けるを、身ミ
之と、ちちへレする也、但蓮も、実ミを多く採クれハ子ミ
の盛ミを、身の盛と、受ウけレとスても、妨サげスし、○登ト
母志岐呂加母モシキロカモハ、之等トモシキラカモ裁キみテ、之レきミを、古コくハシ羨ウラヤむス
るハへり、呂ハ、助辞と、今イハシ習ハれド、実ハ、等ラの
之にて、言をゆるむる辞也、之トモシの例、萬葉にハいハまウ
ると、今ハ誰も知ラずナらハ漏ルり、

○一首のまハ、此、奉る、草香江の入江に花蓮ハナハチヌにハ、花
も実も待マつクが、今イハシ、奈カく喜き大命を承コにも其花の如き、身の
若カかり若る人ニがウやアしトなり、
後文云、爾多祿ニ給其老女カヘシタマヒキ以返遣也、故此四歌者、
志都歌也シヅウタとあり、徐歌シヅウタのウ、既シ出ス、

紀曰、二十三年秋七月辛丑朔、天皇寢疾不豫、ミヤマヒシタマフ是時
征新羅將軍、吉備臣尾代、行至吉備國、過家後所率五百イホノ

蝦夷等、聞天皇崩、乃相謂之曰、領制吾國、天皇既崩、時不可失、乃相聚、結侵寇傍郡、於是尾代從家來、會蝦夷於婆娑水門合戰、而射蝦夷等、或踊、或伏、能避脫箭、終不可射、是以尾代空彈弓、往於海濱上、射死踊伏者二隊、二臺之箭既盡、即喚船人、索箭、船人恐而自退、尾代乃立弓、執末而歌曰、

二十三年、天皇既崩、此他の違へり、既云り、吉備、尾代、孝靈他に、若日子建、吉備津日子、命、吉備、下道、且、尾、祖、とあり、て、姓氏録に、下道、朝臣、吉備、朝臣、同祖、推武彦命之後、吉備武彦命之後也、と云、婆娑水門、八、周防、國、佐波郡、佐波御あり、其処の、水門、は、彈弓、ハ、いとゆ、鳴弦、術也、舒明紀に、産屋、鳴弦、萬葉四に、梓弓、瓜引、夜音之、源氏夕白に、隨身とも、は、さうち、し、ち、く、こ、わ、は、く、ち、ち、と、是也、此、此時

尾代、率、五、百、の、蝦、夷、等、天、皇、崩、坐、り、て、忽、背、て、寇、し、く、を、尾、代、怒、て、咸、く、射、殺、し、雄、健、一、く、歌、へ、り、

游致、備阿賦耶、鳴之、慮能古、阿每、徐、舉、曾、枳、舉、曳、孺、阿、羅、每、矩、徐、と、播、枳、舉、曳、底、那、

○游致、徐阿賦耶、於道會、や、なり、道、と、を、征、伐、を、云、記、葦原、中、國、言、向、段、に、於、此、道、者、僕、子、建、御、雷、神、可、遣、孝、元、段、に、針、間、為、道、也、以、言、向、和、吉、備、國、倭、建、命、段、に、東、方、十、二、道、萬、葉、六、に、賜、酒、節、度、使、卿、等、大、御、哥、に、大、夫、之、去、云、道、曾、云、と、あり、此、等、の、道、なり、常、云、道、路、會、と、と、戦、ふ、こ、と、也、上、の、熊、之、凝、者、歌、子、伊、邪、阿、波、那、和、礼、

○稜威言別

波とあるも、率將戰と云々。其処みろく、耶と、
余のそなり、されば此のハ、新羅征伐道にして、思ひ
よ〜に、合戦よと云々也、解あぐれ ○鳴之應能古と、
尾代子也、自名を云々、上に三重、妹が、自美閉結古と
いゆる類也、子ハ、昔に自称あり、古くハ、名ハ、己う
称へ〜るも、それハち下に、影媛が、自伽宜比賣と、よ
むな〜に、合せて知〜し ○阿毎徐奉曾、枳奉曳孺阿
羅每ハ、天上に〜と、不所聞將有なり、○矩徐々播枳
奉曳底那ハ、於國者將所聞にて、底那ハ、豆牟と云々
なり、

○一首のそを、思ひよ〜に、征伐出立に戦ひしよ、
蝦夷五百人を、唯一人〜と、撃き〜た、此尾代子
の雄猛をバ、天上に〜ハ得聞をもあ〜め、國の限り
は、や〜して後の代までも、語り傳へ〜んと也、
後文云、唱訖自斬、數人更追、至丹波國浦掛水門、盡逼
殺之、とあり、神裔に是、如此健き人もこそ有なり、

